# 求道

第四卷
第七號

（毎月一回一日發行）　明治四十年十二月一日發行

明治四十年十一月十二日　第三種郵便物認可

# 求道第四卷第七號目次


求道

◎歸命之意義　感謝

◎御正忌◎御傳鈔　◎御往生◎其一人は親鸞なり　講話

◎深藉本願興眞宗　聖傳　近角常觀

◎チヤータカ釋尊傳　第三　シーリの商人　感話

◎聖蹟巡拜　講義　鈴木悌

◎歎異鈔—第五章　近角常觀

慶歎

◎眞宗慶嘆　六　信樂開發　七　大悲廻向　嘆咏　左千夫

◎戀嬋娥《短歌》　增田甚

◎新作舊作《短歌》　時報

◎熱田◎仙臺◎敎誨師講習會


## 講話


毎日曜午前九時　求道學舍《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時　第二求道會《九段坂佛敎倶樂部》

毎月二日午後七時　第三求道會《日本橋蠣殼町說敎所》




求道　第四卷第七號

# 歸命之意義

佛陀成道したまひて佛と法とありて未だ僧のあらざる時、南無佛、南無法の二歸を生ぜり。佛鹿園に說法したまひて僧伽を生じてより南無佛、南無法、南無僧の三歸は佛陀敎團に入るものゝ票幟となれり。聖德太子十七憲法を制定したまふや其二に曰く篤く三寶を敬せよ、三寶とは法僧也、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何れの世何れの人か是法を貴ぶに非ざらん、人尤も惡しきものは鮮し、能く敎ふれば之に從ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以て枉れるを直さんと。親鸞聖人化身土卷に眞僞を勘決して曰く、般舟三昧經に言く、優婆夷是三昧を聞て學ばんと欲せんものは、自ら佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祈ることを得ざれ、吉良日を視ることを得ざれと。實に三寶歸命は佛門の始にして亦佛敎の全體也、故に佛敎の信仰門として念佛の一門を生じ、一行三昧に於て彌陀一佛を念じ、遂に彌陀本願の眞髓を開顯して、南無阿彌陀佛の一名號は如來大悲の選擇の親心を示したまふ、吾人豈其親心を受けたてまつる南無歸命の信仰的意義を闡揚せずして止むべけんや。

歸命を解して曰く、我命を歸するの謂なりと、即ち吾人の生命を捧げて佛陀を求むるの意義なりと、若し此意味を以てせば吾人の全力を捧げて、救濟を求むるもの、其の志や頗る切實、其情洵に憐むべきものなりと雖、眞個に未だ安心を得ざるもの、恰も孤兒の親を求むるが如し、如何に悲哀の聲を擧げて旻天に號泣するも遂に親を見出すあたはざる也、近時人生の煩悶に陷りて信仰を求むるが如き皆是のみ、其自己の罪惡を懺悔し、痛哀骨に徹するが如きものあるも、未だ其罪惡救濟の自覺に達せざるが如き皆是のみ、鎭西の歸命、心に助け給へを存して、口に南無と唱ふると云ふが如き蓋し、此意義に於ける歸命なり、其罪惡に泣くの情切なりと雖、未だ大悲の救濟を見出し能はざるものと謂ふべし。

又歸命を解して曰く、如來の壽に還源するの謂なりと即ち十刼の曉、如來正覺を成就したまひし時、既に我等は如來に救濟せられたるなり、吾人然るに無明に遮られて、自己の既

に救はれたるを自覺せず、今や乃ち其如來正覺の生命に還源するの謂なりと、若し此意味を以てせは、救濟頗る容易にして、吾人首を回らせば即ち佛陀、吾人知らず識らずの間に佛陀となれるもの、其心頗る安樂なるが如しと雖、強て自ら安んずるもの、恰も驕兒の親の慈愛に慣るゝが如し、口頻りに感謝の聲を放ち、形頗る恭敬の狀を表す、然れども、中心末だ眞個に親の慈悲を感ぜざるもの也、曰く、親は如何なる罪惡をも恕したまふ也、親は如何程にても財寶を與へたまふなりと。而して眞個に罪惡を懺悔するの念を生せず、心中恩德を感謝するの情湧かざる也、古今安心の領解に曰く、たゞの御助也無條件の救濟也と、一見不可なきが如しと雖、動もすれば、邪見に陷るの虞なしとせず、蓋し是れ、前者の號泣親を求むるの苦を救はんが爲に、或はたゞと謂ひ、無條件と言ひしものなるべけれど、未だ眞個に其苦を救ひ能はざるなり若し此の如くにして安んぜは、是氣安めなり、自ら強て安んじたる也、我既に助かれりと思ひ做す也、我既に佛陀と成れりと思ひ定むることなり、近時主觀的に我救濟せられたる也と叫び、理觀的に世界悉く如來の光明也と唱ふる如き或は此弊に陷る虞なしとせず、西山の歸命、十刧正覺の時我等既に助かれ了りぬ其如來の命に歸る是歸命の意義なりと言ふ、是大悲の救濟に慣るゝものにして、未だ毫も罪惡懺悔の念を生ぜざるものと謂ふべし。

吾人は進みて上記兩者の誤謬に注意するを要す、前者生命を捧げて痛切に罪惡に泣くが如き、世人動もすれば之を稱して罪惡觀といふ、然れども此の如きは猶罪惡に苦みつゝある の狀態にして或は之を煩悶求哀といふべし、未だ罪惡救濟若くは罪惡自覺とは云ふべからす、隨て未だ心中の懺悔を生せざるものなり、何が故に然るか、曰く、是れ眞個の大悲の御親を見出さゝれば也、此の如き苦惱の我等に向て大慈悲の救濟の御聲を下したまふ、吾人此聲に接して初めて大安心に達したるの時心中深く大悲の救濟を見出して、罪惡に泣かずして、中心平和の間に胸底を傾けて眞個の懺悔を生するに至る。

次に後者の如き、如來の命に還りて、たゞの御助に安んじ無條件の救濟に滿足するが如き是眞個の救濟にあらざること既に言ふが如し、此に於てや世人之を評するに、所謂能歸求哀の念乏しきものとし非難して曰く、如來は信ずるものを助け、念佛するものを救濟したまふ、たゞと云ひ、無條件といふが如きは不可なりと言ふ、此に於てや、若し、信ぜざるべからず、念佛せざるべからず、求めざるべからず、遂に煩悶せざるべからずと言ふに至らむ、此に至りて遂に前者の歸命と何の撰ぶ所かあらむ、予を以て之を見るに、たゞと言ひ、無條件といふ、大悲の至極をあらはしたるが如しと雖、是亦眞個に大悲を見出したるものにあらざる也、何んとなれば、たゞと言ひ、無條件と言ふ、何等の修行をも要せずと言ふに止るにあらず、罪惡をも救ひたまふと安んずるに過ぎず、是或は慈愛に慣れたるものと謂ふべし、未だ慈愛を見出したるものとは謂ふべからず、是救濟せられたるものと思ひ做したる也、救濟せられたるものとは斷じて謂ふべからず、是何が故に然るか、曰く、是れ亦眞個の大悲の御親を見出さざれば也、大悲の御親は修行をも要せずとか、罪惡をも救ふと云ふにあらず、修行出來ざるが故に之を哀しみ、罪惡なるが故に之を憐みたまふ、たゞと言ひ、無條件と云ふが如きは、俗に所謂代價を要せずと云ふが如きのみ、佛陀の吾るに對する矜哀の御心は涙のみ血涙のみ、たゞ、無條件の程度ならずや故に此の如きは驕兒の親の恩を感ぜざるが如けんのみ、是恩に慣れて罪惡の悔懺の念なき所以也、故に曰く、其弊や能歸求哀の念に乏しきにあらず、眞個大悲救濟の御聲を聞かざるにあり。

此の如く前者が罪惡に泣きて罪惡を救濟せられず安心せざるも竟畢眞個悲觀救濟の御聲に接せざれば也、後者が慈愛に慣れて慈愛に救濟せられ罪惡を感ぜざるも亦畢竟眞個悲親救濟の御聲に接せざれば也、親鸞聖人實に此大悲深重の矜哀の親心を披瀝して曰く、歸命と言ふは本願招喚の勅命也、嗚呼南無阿彌陀佛は實に如來の我等を矜哀したまふ選擇本願の大悲招喚の勅命也、而して歸命とは吾人正しく其勅命に信順して歸悅、歸稅、中心悅服して其恩寵に感泣するの謂たらずんばあらず、所謂是れ孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して動靜已に非ず、出沒必ず由あるが如けんのみ、聖人釋して曰く歸命と云ふは釋迦阿彌陀二尊の仰に隨ひ、召に叶ふと申す言也と、

しからば、其如來の招喚の勅命とは如何、蓮如上人曰く、阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫、罪業の我等たらんもの罪は如何ほど深くとも、我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたりと、嗚呼罪は如何ほど深くとも宣ふ、いかで吾人の罪深きを自覺せざるべけんや、必ず

救ふべしと宣ふいかで深重の大悲に感泣せざるべけんや、親鸞聖人自督を傾けて曰く、彌陀の五刧思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり、されば、そこばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよと、嗚呼罪深きものをたすけんとの本願なればこそ吾人はます〳〵罪深きをしらしめられ、また其罪深ければこそます〳〵助けんとの本願の正機たること最上無極の恩德と謂つべけれ、眞個に歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘ずるもの、誠に是れ、他力眞宗の極致如來廻向の至心歸命の眞意義也

## 感謝

### 御正忌

秋老ひ、天寒ふして亦御正忌の季節とはなりぬ、寺々に聲高ふして遙かに響く勤行は聖人が胸底より溢れ出でたる正信偈和讃なるを想へば何ぞ聖人の遺德夫れ廣大なる、

如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も
ほねをくだきても謝すべし

居多が濱の畔に低徊したまひ、鳥屋野に庵を結びたまへる聖人流罪の光景宛として眼前に髣髴たり、まことに是れ而り、五刧思惟を實現せしめ、永刧修行を縮寫したまふ、聖人の常の御述懷、歷々として、吾人の耳に響き來る、親鸞一人が爲なりけりの一言は實に十方衆生の爲なりけり、嗚呼何等の幸か此の如き德音に接するを得たる、豈遠く宿緣を慶ばざるべけんや。



### 御傳鈔

御正忌に於て最も吾人心中に到徹するは御傳鈔の拜讀なり吾人は年々歲々益々此御傳鈔の甚深の意義を味ひ來る、苟も眞宗の法流を汲むもの、幼年の時より唯何となく慕はしく且つ樂しきは御傳鈔の拜讀也。而して年漸く老い、信念圓熟し來るに及び其味深長にして喩ふるに物なけん『建仁第一の曆春の頃聖人二十九歲隱遁の志にひかれて源空聖人の吉水の禪房にたづねまゐりたまひき』と誦するときは髣髴として聖人求道入室の昔を偲ぶべく『我二菩薩の引導に順して如來の本願を弘むるにあり』と誦するときは歷々として聖人が光明中の人生を渴仰するに餘あり。『信行兩座』、『信心諍論』、坐ろに吉水黑谷の禪房に詣でゝ、七百年前の昔に參ずるの心地せらる、況んや、是れ他力眞宗の樞機、金剛眞心の骨髓をあらはすの事實たるをや、御傳鈔は洵に是れ如來本願の體現、信仰生活の模範なり、眞個に是れ

明らかに無漏の悲燈を揭げて
遠く濁世の迷闇を晴らし
普く、甘露の法雨を灑ぎて
遙かに枯渴の凡惑を濕さん
とせるもの、嗚呼。

### 御往生

求道得信には『吉水入室』に感じ、家庭生活には『六角靈告』を想ひ、行路艱難には『北越流罪』を偲び、傳道讃嘆には『稻田草庵』を慕ふ、人皆其境遇と年齡とに從ひて坐ろに聖人の御跡を追ひたてまつるを得べし、吾人は『箱根の晩陰』、『歸洛移住』とを追想したてまつる毎に、聖人が諄々として倦みたまはず、老の至るを忘れて、嶮岨を越へ、東西に流離して唯々末代の我等を哀愍攝受したまひて如來二種の廻向を十方にひとしく弘めんとの矜哀の御心、感泣したてまつるに餘あり、而して『聖人弘長二歲戊仲冬下旬の頃より聊か不例の氣在す、夫より以來口に世事を交へず、唯佛恩の深きことを述ぶ、聲に餘言をあらはさず、專ら稱名絕ゆることなし、而して第八日午時頭北面西右脇に伏したまひて遂に念佛の息絕えまし〳〵終んぬ、于時頹齡九旬に滿ちたまふ、』嗚呼是れ我等遺弟慟哭して追慕措くあたはざる所、されど聖人は明らかに極樂の蓮臺にて一味の衆中を待ち受けたまふ、嗚呼慕はし

き哉、聖人の御跡、嗚呼樂しき哉、西方寂靜無爲の淨土。

其一人は親鸞なり

常に反覆する御遺言なれど、御正忌の季節にあたりて聖人影向の聖會なるを想へば猶更神聖森嚴の感に打たれて年々之を想起せずんばあらず、曰く、

我年極まりて安養淨土に還歸すといへども和歌の浦の片雄波のよせかけ〳〵かへらんにおなじ、一人して喜はゞ二人と思ふべし、二人寄つて喜はゝ三人と思ふべし、其一人は親鸞なり

我なくと法はつきまじ和歌の浦
青草人のあらんかぎりは

嗚呼日本國中津々浦々如何なる賤が屋にても、亦是れより遂に有緣の地たるべき西洋の彼岸にも、青草人のあらんかぎりは、十方衆生の住はんかぎりは、御名と共に聖人の影向したまはざる所やある。

南無阿彌陀佛

# 講話

## 深藉本願興眞宗

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日は親鸞聖人御正忌の時節になつた故に、親鸞聖人の信仰の骨目を話さうとおもひます。實は今日新聞には題を一行三昧と出しておきました。一行三昧といふは佛敎のなかで澤山諸佛菩薩が多いけれども其諸佛菩薩を一々念ずるでない、一の阿彌陀佛を念じ、南無阿彌陀佛を稱ふれば一佛即一切佛で、即ち此南無阿彌陀佛一つで救はれる。信仰をたどる上に於て一佛に歸するは即ち一切佛に歸する所以あるが故に、一佛の御名を稱ふることが即ち一行三昧であります。

今日は此事を話さうとおもつて居たのである、然しながら先にも申せし如く今日は聖人の御正忌でもある故、もつと正面より親鸞聖人の骨目をあらはす文字をほしいとおもひさがしました處、深藉本願興眞宗即ち深く本願に藉りて眞宗を興すといふ文字に氣がつき、今日は是れを題にして話さうとおもひます。されば始めに出しておいた一行三昧の意味よりぜん〳〵深藉本願興眞宗の意義に說き及ぼさうとおもひます。殊に今日はいつもとかはりて道筋を立てゝ話した方がわかりやすいとおもひますから秩序的に述べませう。

先づ佛法は廣い。佛法の敎をは如說に修行する一切經の上



にあらはれてある敎をば一々自分に悟つて行かふとする時は實に極りのないことである。若し我々が眞に如說に修行して道を辿りて行くならば、殆んど到處佛の慈悲、光明ならざる處はない。其樣なひろき敎をば一足〳〵自分の足であゆんで行くことは實に困難である。

先づ一つ一つ一切經をよんで行くことからが至難である。況や其敎をは一々自分で實行して行かねばならぬといふことでは朝から晩まで罪深く煩惱多き我等には到底それを爲すことが出來ぬ。それ故其廣大なる一大佛敎を味はゝねばならぬ實行せねばならぬとかゝると我々の力は到底及はぬ。平日云ふ處の聖道門とは是れである。聖道門とは大聖釋尊の通られた道である。其道通り釋尊の行つて行かれた通りを行はねばならぬとなると、實に敎はうづだかくして我等凡夫には行くことが難い。即ち難行道である。

全體佛敎は我々を導びき我々を悟らしめ、我々の心の苦痛をとらしめたいとある敎なれ共、我々の自分の力を顧みてみれば、いかな立派な、うづたかき敎も我々の手にあはん事になる。それ故に大聖釋尊の行はれた道は聖道門、難行道、自力となる故に、そこで他の方法で何か此廣大な味を味はねばいかに立派な敎ありとも我々が其境に行くことは出來ぬのである。

例へば我々が海岸に立ちて大海を眺める。實に極りのない海で、其海にみち〳〵てる水は實に無量である、佛敎の言葉に「佛法の大海」といふことを申します。佛陀の境界は實に海の如きである、其佛法の水をば一々自分で掻いだし量つて行くことは如何しても出來ぬのである。如何にすればよきか、いまいふごとき聖道の敎で一々掻い出して行くことは出來ぬが、外の方法で行けば如何であらうか、それは何かといふに成程茫々として限りのない大海の水で、自分の力で掻い出しては量られぬが、然し、これを味はふならば、即ち一滴の水を滴たらして是をあぢはへば一滴の水で四大海水の水の味を味はふことが出來る。其如く佛法も聖道門、難行道で一々味はふことは出來ぬが、唯一滴佛陀の慈悲を味はへば、佛陀全體の御慈悲を味はふことが出來る。其佛陀の廣大な境界は自分では量られぬが、一佛の名號を一つ味はへば四大海水の佛敎の味は皆それで味はゝれるのである、其門がこゝにあるのである。故に我々が自分で水をかい出すにあらず、澤山の佛の廣大な境を一滴で味はふことが出來る、これより念佛といふことが起つた次第である。一行三昧とは此處である。佛敎の澤山の敎即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度の行、其地無量の行を行ふて行くことは出來ぬ、觀法にしても亦無量である、智慧も亦無量である、是を皆一々實驗し修行し、觀法して行くことは大海の底をさらへるよりも困難である。けれども大海は大海として唯一滴其水を味はへば四大海水を皆一々味はゝずとも唯一滴で味はふことが出來る。

佛法には八萬四千の法門がある、十方恒沙の諸佛があるけれども、一の南無阿彌陀佛、一佛である。即ち阿彌陀佛の名號を稱へるのである。無量の諸佛、例へは海に無量の寶―珊瑚眞珠―等もあるであらう、一々いふと千萬無量、佛の境界も慈悲だの智慧だの光明だの力だのと、無量の功德がある。其如き一々の功德を褒むるはよいが、それもいらぬ、たゞ一滴

の水を掌むるが如くもとは阿彌陀佛の一つである。

我等は此廣き佛法を一念南無阿彌陀佛と念ずる一行を以て足る、此は實行の上よりみて實に有難い。これを佛敎全體よりいへば一佛即ち一切佛の味である、一佛即一切佛である、一佛即一切佛とは實にありがたい。私がこゝて一寸御慈悲のありがたいことをいへば、皆此席にある方々がよろこんで下さるも一佛即一切である。あの庭の木の葉の上の朝日の影は日本中、否世界中をてらす日光の光である。露の上にやどれる月影は世界をてらす月影にかはらぬ。一念南無阿彌陀佛と稱ふる稱名は光明遍照十方世界の大慈悲を念すると同樣である、是れが念佛の意義である。華嚴經等の味はみな是である、度々いふ奈良の大佛の臺座の蓮華の一々の花瓣にみな澤山の佛菩薩がおはして、其一々の花瓣の佛が即ち大なる毘盧遮那佛である、されば一々我々共の上に宿つて下さる佛の御慈悲は即ち廣大なる佛の御慈悲に他ならぬのである。

こゝの處を親鸞聖人が曇鸞大師の心を和讃に

彌陀の淨土に歸しぬれば、即ち諸佛に歸するなり、
一心をもちて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなり、

とある、一念南無阿彌陀佛ととなへる一行に一切諸佛がみな、こもつてあるのである。こゝを、も一つ日本の宗敎の歷史でいふと、良忍上人が融通念佛を稱へ出されたのもこれからである。天台宗、眞言宗でむづかしい法門をいふけれども實行がむつかしい故に、良忍上人が一佛一切佛、一行一切行、南無阿彌陀佛の一行をとなふれば、即ち一切の行を行ずるのであるとて、融通念佛を稱へられたのである。即ち聖道門より淨土門にうつるかけはしとなられたるもので、即ち法然上人の先驅者である。

そこで一言しますが、此廣い佛法が一南無阿彌陀佛と縮まつたのは實に味が深い、若しこれがなかつたならば手のつけ樣がないのである、諸君が佛敎の演說をきくにしても十人よれば十人十色の事をはなして居る、それで佛敎をはなれて居るかといふにそうではないが、十人十色百人百色の事をいふて居て、一言で申せば要領を得がたい、又從つて是等を實行せんとするにも困る、聖道門、淨土門、自力、他力といふはこゝで別れるのである。いかにも聖道門は高尙で釋尊の道であるが、實に「一には大聖を去ること遙遠なるによる」和讃に

釋迦如來かくれまし〳〵て、二千餘年になりたまふ、
正像の二字はをはりにき、如來の遺弟悲泣せよ、

で、釋尊の御在世にでも生れあはせば行ふ事が出來たかもしれぬが、三千年後の今日では處もちがへば時もちがふ、如何しても其如く行はれぬ。「二つには理深く解微なるによる」で、我等は其門をすてゝ易行の一門に入るのである。

殊に一行三昧に於て、一行ぢやといふことが大切である。それのに多くの學者は佛法を汎神敎抔といひ、廣大で要領を得がたいといふて、此一つに廣大な敎が縮まる處を知らぬ、即ち汎神とはパンセイズム、即ちパンといふ字はギリシヤ語の「總て」といふ字である、即ち佛敎では一切といふとてある、一切のひろい敎は一つに亦ちゞまるといふことを氣づかぬ。是もヘンカイパンとて一つは一切なりといふこともいふが、その如く一切が一つに收まるといふことを知らぬ。是は先には良



忍聖人につきていふたがなほ其以前に遡れば支那の五臺山に一行三昧の法があつた、之を天臺の慈覺大師が入唐して傳へられ、天臺宗ではじめて一行三昧といふ事が出來たのである。これによりて佛に接し近づき親しむといふことだけはあつた。これは實に貴い法で、これによりて日本には南無阿彌陀佛の法が出來たのである、四大海水の佛敎を一つの南無阿彌陀佛で味はゝしてもらへるといふとは實に貴い事である。これは特に親鸞聖人法然上人をいふ迄もなく一即一切の敎は其已前よりあつた事を申したのである。

此度はすゝんで法然親鸞聖人の特色を話さうと思ひます。今迄で定めし皆さんは一切の佛敎は一におさまるといふことがおわかりになる事でせう。華嚴經にも

文殊の法は常に爾なり、法王は唯一法なり、一切の無碍人一道より生死を出てたまへり、一道とは一無碍道是なり

とある。眞に唯一道ぢやといふ絕對の味がすなはち一行三昧である。一佛を念ずるは一切佛を念ずるのである、一念となへる南無阿彌陀佛に一切の行があるといふのである。これで一行三昧はわかつたが、こゝに氣をつけねばならぬ。なるほど澤山を一つにまとめても南無阿彌陀佛一つを念するといふ事にのみ力を入れたならば陀羅尼を稱へるのもおなじ事になる。成程澤山をすてゝ一を念ずる迄には行つたがやはり稱へなければならむと力めば折角すてたのがつまりすてぬ前とおなじ樣に一滴〳〵の水を呑んで味はふて行く樣なもので一つにちゞめた所詮がない、即ち一行三昧でめぐみをよろこぶ事を忘れて、こちらの實行てつとむる事となるから、一滴の大海の水をなめてからいと感ずる如く、一佛を念じてありがたいとはならずして一滴〳〵をなめねばならぬとなると、たゞ口丈けで南無阿彌陀佛を勉めてとなふる事となる。すると、折角の一行ももとの一切行を一々行ふと同樣になる。されば南無阿彌陀佛の深き味を得る事が出來ぬ。此點に於て著るしく我等を明にして下さつたのが支那の善導大師である。

善導大師は次の如く云はれた。

問て曰く一切の諸佛三身同じく證し悲智果圓にして亦無二なるべし、方に隨つて一佛を禮念し課稱せば亦應に生ずるを得べし、何が故ぞ偏に西方を歎じて專ら禮念等を勸る何の義かあるや。

成程一即一切佛て、一切の諸佛は皆同じことならば、どの佛を念じてもよいではないか、南無觀世音でも南無三世諸佛でも南無大日如來でもよいではないかと、つまりどの一佛を念じてもよい事になる、しかるになぜ特に西方の彌陀一佛を擇びて念ずるのであるかときいたのである。これは實に最の事である。これに對して次の樣にいはれてある。

答曰く諸佛の所證は平等にして是一なれども若し願行を以て來たし收むるに因緣なきにあらず、然るに彌陀世尊本と深重の誓願を發して光明名號を以て十方を攝化したまふ。但し信心をして求念せしむ、上一形を盡し下十聲等に至るまで、佛願力を以て往生を得やすし、是故に釋迦及諸佛勸めて西方に向ふるを別異となすならくのみ。と

一切の諸佛はみな平等である。阿彌陀佛の正覺（サトリ）と釋迦牟尼佛の覺と毫もちがひのある筈はない、其有樣は先にもいふごと

く木の葉の上に輝く光は世界の上にかゝやく光ぢや、正覺に於ては平等である。然し若し願行を以て來し收むるに因緣なきにあらずてある。此處に於て、願行といふ點が實に肝要である。一切の諸佛が我々を救はんが爲にそれ〴〵にありがたい願と行とがある。おなじ正覺の佛が種々に別れて來る所以のものは此願と行とにちがひがあるからである。先にもいふ如く一切の諸佛の中より一阿彌陀佛を擇んで、一切佛をたゞ此南無阿彌陀佛に收むる迄はよいが、決してたゞ便利だからといふのてはない。これには深い因緣があるのてある。即ち佛が衆生を助けるには願と行とを以て救けて下さる。我々が佛を念じて助かるにはあらず、阿彌陀佛が大慈大悲の願行を以て我々の上に力を及ぼして下さるからてある。即ち阿彌陀佛が光明名號を以て十方を攝化したまふ。阿彌陀佛に深量の誓願があつて我等を光明名號を以て攝取して下さるといふ大なる願行があるのてある。其願と行とが阿彌陀佛にある故に我等が特に阿彌陀佛を念ずるのてある。禪宗ては庭前の柏樹子といふて悟り、一本の草や木をみて忽然として大悟徹底するといふが、我々が阿彌陀佛を念ずるのはそんなものてはない。佛には本願がある。願といふは阿彌陀佛が我々に向つて下さる御心てある。阿彌陀佛には特に此の廣大なる願がある。願とは四十八の本願てある。殊に第十八の願てある。此廣大の本願ある故に我々が助かるのてある。此廣大なる本願に始めて日をつけて下されたのが善導大師てある。親鸞聖人が特に略文類に於いてはれてある。

善導獨り佛の正意を明にし、深く本願に藉りて眞宗を興したまふ。定散と逆惡とを矜哀して光明名號因緣を示す。實にありがたい事てあります。其如く他力眞宗といふものは全く此本願から來たのてある。此本願なくばいかに念佛するとも一つも要領を得る事が出來なかつたのてある。一切の行を行ずる必要はない、たゞ念佛の一行てよいといふだけては唯簡單なだけて、本願の根本に目をつけねば何にもならぬ。偖其本願とは何かといふに第十八の願に

設ひ我佛を得んに十方の衆生至心信樂して我國に生ぜんと欲し、乃至十念せん、若し生ぜずば正覺を取らし、

とあるのてある。十方世界千萬億の衆生に我名を稱へしめて救はんとの本願てある。此本願なくば阿彌陀佛を念ずることは無意味てある。佛の本願は何か、佛の方より名のりをあげて、自分の子供等に我名を稱へしめて以て衆生を救ひとらんといふ本願てある。結局我々が南無阿彌陀佛と念佛するのは一即一切佛といふばかりてはなくして、阿彌陀佛にもと深重の本願がある故に此一佛を念ずるのてある。そこて前の意味とは全く意味が異つて來るのてある。此廣大なる佛の本願に救はれる事をよろこんて、あゝありがたいと念佛するのてある。かく一點佛の御慈悲がしれてくる處て一切佛の御慈悲もわからしていたゞけるのてある。斯の如く一つをしれば皆しれるが、此一つをいたゞくことが實にむつかしい。其一つを如何にしていたゞく事が出來るかといふに、自分の自力てするのてはなくして、彌陀深重の本願を起して光明名號の因緣を以て十方衆生を攝化して下さる、即ち智慧の光明と慈悲の名號を以て我々を攝取して下さるのてある、故にむかふよりしら



して下さるのてある。丁度親の子を忘れぬ心を以て我々に向つて下さる慈悲てある。名號とは佛が我々を求めて佛からあげて下さる名のりてある。以上は善導大師が本願をお說き下さつた文を說いたのてある。

次に進んて此善導大師の本願といふ事に目をつけられたのが法然上人てある。此事は度々申しますが、善導大師のお言葉の中に於て特に法然上人が四十三歲の時目をつけられたのは本願の文てある。勿論法然上人は此以前から念佛丈けは大切な事てあると氣がついて居られた。天臺の慈覺大師や融通念佛の良人上人の事は既に先にのべて置いたが、又源信僧都といふ方が念佛に重きを置かれて往生要集を撰しておいてになつた。此往生要集には念佛一行がかいてある。法然上人は前より此集をよまれて、念佛に深く氣がついて居られたけれども安心が出來なかつた。いよ〳〵四十三才の時に於て善導大師の散善義の文を見て

一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者、是名正定之業順彼佛願故

の文に至り、成程こゝてある、南無阿彌陀佛々々と行往坐臥時節の遠い久しきに係はらず、專ら念佛する者を捨てゝ下さらぬが之れ實に佛正定の業てある、何故なれば此の人は彼の佛の本願に隨順するが故てあると、此の文を見て心肝に徹して喜ばれたが法然上人てある。先にもいふ如く日本てもそれ迄は唯念佛が貴といと迄は解つてあつたが、此の念佛て我々の救はれるは佛に此の本願があるからだとは誰れも知らなかつた。今日の言葉て言へば法然上人は本願を發見して下されたのてある。ニュートンは引力を發見した。引力はなにもニュートンが發見せずとも世界の始めよりあつたのだが、ニュートンによりてはじめて見いだされたのてある。その如く本願は昔よりあれども日本ては法然上人によりて始めて發見されたのてある。書物の上に於て發見されたのてなくして、心の上に於て發見されたのてある。かくの如く念佛はかの佛の願にしたがふが故に貴いのてある。となつて從來の念佛と意味が一變して來ました。こゝの處はよほど肝要てある。即ち廣大なる佛法が念佛の一行になり、念佛の一行が一つの信になつたのてある。

處てこれから氣をつけねばならぬ事がある。話が大變專門的になりますが、善導大師の言南無者の釋に南無といふは歸命也又是發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふは其行なり、此の義を以ての故に必らず往生を得とある。されば此南無阿彌陀佛にすべての願と行とを具足してある。南無とは願てあり、阿彌陀佛といふは行てある。願と行との此二つはいつても大切てある。例へば皆さんが勉强するにしても此の願行の二つてある。先づ第一に何にならうとの願心が大切てある、いくら勉强しやうとしてもまづ何にならうとの目的がなければどこへ船がつくかわからぬ、これては何事も成就する事は出來ぬ。又いくら至誠に目的をたてゝやらうとしても、心斗りて願を起して實行がともなはねばだめてす。かくの如く願と行とは勉强するにもかくべからざるものてある。如此く願力があつて願力に對しての行がなければ何にも出來ぬ。佛法の修行に於ても佛にならうとの願が入り、其れに對する行が必要てあ

る。即ち佛にならんといふ大菩提心を起し、それに對して六度萬行を修する事が必要になるのである。それならば此南無阿彌陀佛の中にどこに願行があるかといふに「南無といふは歸命也又是發願廻向の義也」で、南無は願である。次に阿彌陀佛といふは其行ぢやといはれてある、即ち我々が南無と佛に歸命すのが願、阿彌陀佛とすがるのが行である。

されど南無と歸命し阿彌陀佛とすがらねばならぬとなると又自力になつてしまふ。そこで善導大師は南無の願は佛の願である。佛が我々を救ふ爲に第十八の願を起して下された、其願に於て佛が南無阿彌陀佛と稱へしめて衆生を救ふ爲の行がある、かくの如く我等を救はん爲の佛の願行である、といはれた。

すると、こゝに於て南無と歸命するのも自分で稱へるのではない、佛の方より我等に與へて下されたのである。我々一切經を讀んだり六度萬行を修したりする事は到底出來ぬ淺ましきものなれば、佛の方より佛がえりにえつて此南無阿彌陀佛を與へて下されたのである。で我々はたゞ此仰のまゝに南無阿彌陀佛をとなへる斗りである。故に法然上人は撰擇本願念佛集南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と申された、撰擇本願とは佛がえりにえつて下さつた本願であるといふのです。これよりしばらく法然上人が如何に撰擇本願といふ事をいはれたかを申しませう。

選擇集のなかに「彌陀如來餘行を以て往生の本願となさずたゞ念佛を以て往生の本願となすの文」とあつて、阿彌陀佛の他の一切萬行をば往生の業とはせずしてたゞ念佛一つを以て往生の行とせられたことをかいてあります。即ち我々が廣い中より一を取つたのではなくして、佛が廣い佛法海中より、念佛の一滴を取て味はゝせて下されるのである。さればこそ選擇本願といふのである。で其文に曰く

無量壽經に曰く設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺、

觀念法門上文云若我成佛十方衆生願生我國稱我名字下至十聲乘我願力若不生者不取正覺

往生禮讃同引上文云若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不正者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生

法然上人の書方は實に明瞭である。今其處を申せば

私云一切諸佛各有總別二種之願總者四弘誓願是也四弘誓願といふは一切佛にはみな衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願斷等の四つの願があるのである。然るに今此本願は今此四十八願者是彌陀別願也、問曰彌陀如來於何時何佛所而發此願乎。

肝要な處丈けを申せば

其時次有佛名世自在王如來時有國王聞佛說法心懷悅豫尋發無上正眞道意棄國捐王行作沙門號曰法藏高才勇哲與世超異諸世自在王如來所……超發無上殊勝之願、其心寂靜志無所著一切世間無能及者、具足五劫思惟攝取莊嚴佛國淸淨之行、阿難白佛、彼國土壽量幾何、佛言其佛壽命四十二劫、時法藏比丘攝取二百一十億諸佛妙土淸淨之行、

とある、此文の中に撰擇といふは二百一十億の諸佛淨土より



淸淨の行を取つて惡しきをすて、善を選らんで眞實の報土を造られたのである。偖其えらびて下された工合はどうかとなつて

夫約四十八願一往各論選擇攝取之義一無三惡趣願者於所觀見之二百一十億土中或有三惡趣之國土或有無三惡趣之國土即選捨其有三惡趣國土選取其無三惡趣善妙國土故云撰擇也第二不更惡趣願者於彼諸佛土中或有縱雖國中無三惡道其國人天壽終之後從其國去復更三惡趣之土或有不更惡道之土即選捨其更惡道麤惡國土選取其不更惡道善妙國土故云選擇也、

法然上人の言ひ方は實に明了である。次には

第三悉皆金色願者於彼諸佛國土中或有一土之內有黃白二類人天之國土、或有純黃金色之國土即選捨黃白二類麤惡國土選取黃金一色善妙國土故云選擇也

斯の如く段々と四十八願につき、一々撰擇攝取を言つて來て、最後に十八願に到りては何とあるかといふに、

乃至第十八念佛往生願者於彼諸佛土中或有以布施爲往生行之土、或有以持戒爲往生行之土、或有以忍辱爲往生行之土或有以精進爲往生行之土、或有以禪定爲往生行之土（布施持戒精進禪定等は六度の行である）或有以般若（般若は智慧なり）爲往生行之土、或有以菩提心爲往生行之土、或有以六念……或有以持經……或有以持呪……或有以起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種々之行……或有專稱其國佛名爲往生行之土……即今選捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行選取專稱佛號故云選擇也

實に簡單明晰である。こゝは大事の處である。阿彌陀如來は他の方法では助けるとは仰せられぬ、布施持戒乃至父母孝養等の六度萬行を以て助けんとは仰せられぬ。たゞ念佛の一行を以て助けると仰せられたのではないか、我々は全く佛のめぐみ、一つで助かるのである。佛よりえらびあたへたまふた此念佛の力で助かるのである。このえらばれた念佛なれば實にありがたい、故に南無阿彌陀佛は佛が深く御苦勞思惟して下されたあげく、此一念佛を取つて授けて下された。こゝが法然上人の念佛である。即是其行と言ふは選擇本願是也とは此意味である。

法然上人に御弟子の一人が戒を持つのは如何かときかれた時に、のたまふ樣、佛は戒を持てとは仰せられぬ。たゞ本願に從ふものを助けるといふのであるぞといはれた。たゞ念佛させていたゞく他はないとの義である。親鸞聖人は此法然上人の特色に目をつけられたが、他の弟子の多くはみな此點を思ひあやまつて、たゞ念佛をとなへんならんと力行する樣になつて、此ありがたい一行を行ぜねばならぬと力む樣になつた。

これではいかぬ。佛のありがたい撰擇本願をうけて、あゝ有がたいと親樣の仰通りよろこんで念佛することが肝要である。これはもう我々がどうのこうのと計らはずとも先天的に我等の上に下つて居る本願の慈悲なれば、そのまゝよろこんで行くのである。これで善導大師より法然上人に至るまでの道筋がわかりました。

そこで、その法然上人の御弟子中に於て此點に目をつけられたのが親鸞聖人である。深耕本願與眞宗で、親鸞聖人が眞宗

を起されたのは全く佛の本願より來つたのである。善導大師が念佛成佛是眞宗と仰せられた、此念佛は本願のめぐみをみてとなへる念佛である。故に聖人が法然上人の仰をきゝて親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをかふぶりて信ずる外に別の仔細なきなり。

といはれた。このよきひとといふは法然上人の仰せである。法然上人の仰せはやがて阿彌陀佛の仰せである。法然上人の仰せは「たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」といふ仰せである、その仰せが即ち佛の本願である。この事を聽いて聖人は非常に歡ばれてある「あゝさようであるか」と其まゝうけられた。これが他力の實にありがたい處である。一代の間に一切經を六度迄よまれ、いろ〳〵戒を持ちて修行なされた法然上人、其上人が其本願をきくなり一切の諸善萬行をみなこと〴〵くなげすてゝしまはれた。つまり此本願をきくなり他のものはもはやいらなくなつてしまつたからである。古來宗教家の態度はみな絶對的である、日蓮上人の如き、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と、所謂四個格言を絶叫されて他の事はみないかぬ、たゞ南無妙法蓮華經たゞ一つであると叫ばれたのも宗教絶對の態度である。法然上人も同じく自力ではいかぬ、たゞ念佛の一行であるといはれたは絶對である。絶對は同じけれども日蓮上人は全く自己の信仰ていはれたし、法然上人は自分はいかぬ者なれば、佛が他の行て自分を助けるとは仰せられぬたゞ念佛の一行をえらび下されたといふ、本願をそのまゝいたゞきて自分のはからひ心を投捨てゝいはれた絶對である。法然上人の絶對の態度は本願が本になつてあらはれたのである。此法然上人の撰擇集をよむ上に於て世人は未だこゝの見樣がにぶい。上人のかき方は實に鋭い。「末法百年の後に餘行は悉く滅び唯持に念佛一つ止まるの文」「彌陀の光明は餘行のものを照らさず唯念佛行者を攝取するの文」「六方恒沙の諸佛は餘行を證誠せず、唯念佛を證誠のするの文」といふ樣な風に此の外選擇集一部は凡て此の筆法にて實にするどい書方がしてある。釋尊が此世に興出して下されたのもつまり我等に念佛の一行を傳ふるが爲である、十方恆沙の諸佛も唯念佛一行を證誠して下さる。前號求道の感謝欄に法然上人の手紙を出しておきました。これは法然上人が熊谷蓮生坊に致された極短かき手紙で次の如きものである。

### 淨土宗安心起行事

義なきを義とす、樣なきを樣とす、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛と申せば十惡も五逆も三寶滅盡の時の者も一期に一度も善心なき者も西東わきまへぬ者も、決定して往生を遂げ候なり、釋迦彌陀を證とす。

實につよいことをいはれたものである

此の如く上人は手強く本願を御歡びなされました。それ故親鸞聖人は此法然上人より本願をきかれたなれば法然上人の仰せそのまゝが佛の本願の仰せとうけられたのである。唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、法然上人の仰を通じて彌陀の本願をきかれたのである。「彌陀の本願を措きては他にたすかるすべきはない此淺ましき親鸞である。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說教虛言なるべからず、善導



の御釋まことならば法然の仰せそらごとならんや、法然の仰まことならば親鸞がまをすむね、またもつてむなしかるべからず候か」、と嘆異鈔にもいはれてある。彌陀の本願そのまゝが此人生の上にあらはれてきたのが親鸞聖人の特色である。佛の本願が我々を促したまひ、哀々たる親心を以て光明名號の慈悲の父母が本願を屆て下さる、故に南無阿彌陀佛と稱へる、南無は親の佛より我々を呼んで下さるなれば、我等が念佛して居る間に親の慈悲がしみ〴〵と味はゝしていたゞける。親鸞聖人が二十九歲の時法然上人にあはれたは此本願をきかれたのである。爾來聖人は一代九十年の間、常に南無阿彌陀佛〳〵と念佛の一行をよろこばれた、けれども聖人は一として自分の行とはせられない。歎異鈔に「念佛は行者の爲に非行非善」と申されてある。我々が自分でつとめる行てなき故に非行である。又佛の善でこそあれ、我等が念佛申したりとて些かも善を行なつたといへぬ、故に非善である、たゞ佛より與へたまふ念佛なれば是を佛の大行といふのです。本願は阿彌陀佛の我等を助けるとの御約束である。此約束よりあらはれ出てたる大行が念佛である。法然上人には弟子が澤山ありましたが、皆念佛を行ずる點にのみ氣をつけて本願に氣づかぬ故に間違つてしまふた。御弟子多くあつまりたる時信不退行不退の御座を別たれた時に、御弟子三百八十餘人中に於て信の坐につかれたは僅に親鸞聖人、聖覺法印、釋の眞空、熊谷蓮生、坊等の數人であつた。我々が南無ととなへられるのも佛が深重の願を起して下されたからである。聖人は進んで五念門、これは信仰より自然にあらはれ來るべき行であるが、これをも佛の方につけて佛の五念門とせられた。親鸞聖人は苟も願といふ願、行といふ行は皆悉く佛の方につけられた。其の佛の願行により南無阿彌陀佛をいたゞくなれば、南無阿彌陀佛〳〵となへてる中に佛の願行をいたゞくのである。私は毎朝勤行するに、六首引をつとめて南無阿彌陀佛〳〵と、度々節をつけてくりかへしつゝ向ふにかけてある六字の名號を拜する時は實にありがたい。たゞありがたい〳〵とくりかしてよろこぶ他はない。

我々は怠つて居る、既に念佛するといひながら一向念佛があらはれてこぬ。念佛してたすけられまゐらすべしとよきひとの仰をかふむりながら忘りがちである。

よきひとの仰を信ずるといふはその通りやるのである。信ずるといふて行はねばそれは信じたのでも何でもない。信じた上は勉めねども自然に行なへるのが、眞の信心である。あゝありがたい〳〵と心中に一念〳〵にいたゞく事が肝要である。

十方三世の無量壽
おなじく一如に乘じてぞ
二智圓滿道平等
攝化隨緣不思議なり
彌陀の淨土に歸しぬれば
すなはち諸佛に歸するなり
一心をもちて一佛を
ほむるは無碍人をほむるなり

聖傳

# ジヤータカ釋尊傳

## 第三　シーリの商人

此說敎は亦大聖サーヴハチにおはしまし〻時、悟道に奮進せんとして止みし僧につきて說かれたり。

我等かくきゝぬ。彼弱志の僧、衆僧に促されて共に世尊にまみえし時、師のたまふ樣

「兄弟よ、道と果に汝を導くに最もふさはしき法に遵ひて誓をとりし後、目的をすつる汝は、必らずや百千の價値ある黃金の皿を失なひしシリヴハの商人の如く永く悲しみに沈まん」と

僧等大聖に事の次第を說きあかしたまはんことを請ひ奉れり。すなはち大聖は生死の中に隱されたる事をあきらかにしたまへり。

今をさる五代以前に、菩薩は錫と眞鍮との商人なりき。名をシリヴハといひ、シリヴハ國に住みき。このシリヴハは同じく錫と眞鍮とを商なへる貪慾なる人と共にチーラペーハ川を渡たりてアンダービユラとよべる町に入りぬ。而して彼等は市の街をわけて、菩薩は彼に定められたる街を、他の者は彼に當れる街を商なひしつゝ行けり。

此市中に嘗て一富豪ありしが今は見る影もなく衰へて貧窮に迫まれり。息子等も兄弟も死にたえて財產は悉く失なひぬ、たゞ一人の娘と祖母の殘れるが人に雇はれて僅かに生計を得つゝありき。此家には昔し家長が全盛の折用ひなれし金の皿ありしが、長く古き鉢皿の中に打捨てられ、塵もて覆はれしものから、彼等は其皿の金なる事は夢にだもしらざりき。

其時貪慾なる金物商は「水入れを買ひたまへ〳〵」とよばはりつゝきかゝりしが、娘は商人をみて、祖母に曰はく、「祖母よ妾にある裝飾品を買ひてよ」と

「されど我等は貧し、よき子よ、我等は其爲に何をか換へん」

「われらのこの皿は何の用もなし、君はこれを彼に與へて妾の爲に何かを購ひたまへ」

老婦は商人を呼びて坐を取らんことをすゝめ、かの皿をあたへて曰はく、「汝はこれをとりて此小娘になにかを與ふべしや、」と。

商人は皿を取りて思へらく、「こは金ならん」と、打かへしみて、彼はそと針もてそが裏を搔きしに、まことや價高き黃金なりけり。貪慾なる彼は此皿を一物をも與へずして我物にせんと心に深くうなづきつゝ曰く、「何たる價なきものぞ、そは半錢の價値だもなし」と、地に打ちすてゝ坐より立ちて行きすぎぬ。

折から彼等は各街をかへて、菩薩は今や貪慾なる商人の過ぎ行きし街に入り來りぬ。「水入れを買ひたまへ〳〵」とてかの小娘の家の前に來れり、小娘また祖母に先のごとく請ひしに、祖母は「我子よ今きたりし商人は床に皿をなげすてゝ行しきに、今何をか與へて買ふ事を得ん、」と。



「祖母よ彼の商人は嶮相なりき、されど此度の商人は快き顏してやさしき聲をもてり、恐らくは彼はそをとらん」

「さらば彼を呼べ」と、彼內に入りしとき皿を與へてみせしめぬ、彼其皿の金なるをみて曰く、「母よ、此皿は百千金の價値あるものなり、我が所有する財物を擧げて汝にあとふとも、價に於てひとしからじ」

「實に！、されど君よ、今きたりし商人は半錢のねうちもなしとて、そを地になげすてゝゆきぬ、そは必らず汝の德の力により金とかはりしものならん、されば我等は汝にそを贈物として與へん、汝は、我等に何なりともよき程にあたへたまへ」、と。

菩薩は彼等に手にもつ所の總ての金錢と、商品價五百金計りのものを渡しぬ。而して彼等にたゞ八ペニーと袋と貢物をのせし車とのみを與へんことを請ひ、これらを取りて別れぬ。

彼は速かに河岸に到り、船頭に八ペニーを與へ船にのりぬ。

暫時あつて、吝嗇なる商人は先の家に歸りきたり、

「かの皿をもち來れ、我は其爲にあるものを與へん」と。

其時老婦は彼を叱して曰く「汝は百千金の價ある我等の黃金の皿を、半錢のねうちだもなしといひぬ、されど正しき商人汝の主人とみゆるが、我等に多くを與へてそをとりてゆきぬるよ」と。

商人此言をきゝ大に驚ろき「彼の爲に金皿を失なへり、オヽ、價百千金なるを、彼は我をも滅亡せしめぬ」と、いたましき悲しみに打たれて、彼は正氣を失ひ、自覺をも保つあたはず、彼のもつ所の金錢をまきちらしつ商品をなげうち衣服をも剝ぎ去りて菩薩を追ひ行きぬ。

彼河岸に達せし時彼は菩薩のすぎ行くを見て叫びて曰く

「やよ船頭！船を止めよ〳〵」と

されど菩薩は「止むるなかれ」と拒みて靜かに向の岸につきたり、他の商人は別れ行く菩薩を眺め〳〵て激しき痛恨に身も世にあらせず、彼の心臟は熱し血は遂に心臟の破るゝ迄口より迸しり出でぬ。

かくして彼は菩薩に對して怨をのみつゝ、其場に於ておのれ自身の滅亡を來しぬ。こはデヴハダッタ（提婆達多）が菩薩に對して怨みを懷きし始めなりき。

されど菩薩は施物を與へ又他の善業をなしつゝ彼の行によりて過ぎぬ。

佛陀此說敎を終りし時次の偈をときて曰く、

めぐみあふるゝ今の世に
幸ある樣に到らずは
シリヴハの商人の如くにて
深き恨みになやむべし

かくして師は彼僧を阿羅漢果にみちびき、四諦に住せしめたまへり、而して說敎の終りに落膽に沈みし僧は最高の果即ち涅槃を得ぬ。

師は後に彼の商人の物語りを說き明かして曰く

「彼時の愚かなる商人はデヴアダッタにして、賢き商人とは我自身なりき」。と

感話

# 聖蹟巡拜

鈴木悌

昨年四月加濕美留より雪山を越えラダックを經て、西藏の西端ルドックに到りしに、英政府の抑止する所となり、前進を繼續する能はず、此に於て一時古へ晋宋齊梁唐代の間渡天の要路たりし附近の葱嶺を登り、土其古坦に入り、流沙を渡り、蒙古を横斷せんかと思考せしも、大聖御出生の靈跡は前年留學中に訪問し能はざりしを以て、今回其素志を遂げんと決し、道を轉じて再び比馬拉耶の險を攀ぢて印度に出で、暫くナニタルに於て凡そ一千五百哩八十日間の疲れたる足を休めたる後、七月卅一日クモンの山を下り、波羅奈鹿野苑を巡拜し、八月六日佛陀御入滅の聖地拘尸城に着し、幸ひ雨晴れ月もおぼろに出たれば、仝夜午後十時マハクワの靈場に詣て青苔に結ばれたる古塔の下、頭北面西右脇の御像の前に夜もすがら遺敎經を拜誦したりき。噫此遺敎經實に我が始めて佛恩の深きを感得せし書にして、爾來拾有七年五洲に落魄漂零中に於ても互に主伴となり、我が半生の行爲を指導し來りし聖經、今其聖經其場所其靈前其時刻、中夜寂然として聲なき森林中、萬感湧出して嗚咽禁ずる能はず、嗚呼如來の法身は長へに住し給へども、我身は常に八邪八風に動かされ、三毒五欲の爲めに惱まされつゝある罪業の凡夫、若し目のあたり六波羅密慈悲喜捨三十二相八十種好具足の色身おはして我等を濟度し給はらんには如何ばかり嬉しからまし、噫悲しい哉漏盡の聖者遂に見ゆるの期なく、來らん彌勒の世は尚ほ遠し、たとひ十方の淨土に往生するも大恩敎主なくば何の樂しみかある。我れ生れて如來の御在世に遭はざりしこそ悲しみの復悲しみなれ、願はくば花の下にて春死なんとの誓願空しからず、泉州の林中に目出度く往生の素懷を遂げられたる聞位上の如く、譬ひ國と處とを異にするとも、せめて如來御入滅ありし其時其日其月に、此娑婆世界を去らしめ給へと、三世の諸佛に祈願を込め翌朝同所を發足せり。

釋尊御生誕の聖地は一千八百九十七年に發見せられて、今の名はローミンデーと稱すとは、前年印度滞在中ムケルデー氏の論說を通讀して記憶に存せしも、其位置は全然忘失したるを以て、到る處にて問尋せしも詳にする人なく、百方苦心の結果漸く波羅奈神智會に於て現今のカリラバート昔時の迦比羅衛なる旨の報を得て、此拘尸城より同所に向ひしに、停車場より凡そ二哩の處に佛像あり。されど是れ迦比羅城跡と斷すべき證は考へ難く、心裡何となく之を否認する如き感あり、附近の人々に頻りに辨明を求め居りしに、測らずも冬期多くの支那人緬甸人ショラトガンヂ迄乘車する旨驛員よりの報を受けて、直ちに轉じて同停車場に至りしに、如何なる佛跡かは知らざるも、彼等巡拜者の赴く所は是より十哩餘の北方なるトリフワと呼ぶグルカ人の居村なりと聞く事を得たり。是に於て翌朝是處より北に向ふてネポール國に入りしに、英



領を離るゝや正路なく、唯泥と水とを以て充たされたる畑畔のみ、其間を渡渉してトリフワに着き、縣官マラバラハキン氏に旅行の許可を出願せしに、同氏は一昨年十一月大宮池田の二氏來訪の節、中央政府に無斷にて旅行せしめし爲め、五ルピーの罰金に處せられし由にて、直接國王の許可を受くる必要ありしを以て、首府カトマンドウに打電し其指令を待つ事とせり、元來此國には電信局あるなく、爲めに六七十哩の間は飛脚にて便ずるものなれば、其往復に要せし八日間は同所警察署の樓上に寄寓し、いと懇ろなる待遇を受けたりき。

蒸し暑き氣候、日々に降り來る雨、聽くものはジャコールの叫び、時々二三の印度人を訪ひ、四方山の雜談に日を送りつゝ、此地に來れる日本人は島地、淸水、大宮、池田、藤田の諸氏と外一名なりしを聞き得たり。彼等が其人々に對する見解こそ面白けれ、島地氏一行三名は從僕など召連れ西洋人の如くにして、靈場參拜者とは見えず、寫眞器さへ携帶したれは多分寫眞師なるべし、大宮氏等の食物を瞥見せしに肉食し居りしは不殺の敎を奉ずる僧侶の所行としては怪し、或は基督敎なりしも知るべからずなど唱へ、故藤田氏は優婆塞の白衣を着し非時に食せず、常に禪定を修し居りし爲め、比丘と誤認し、彼等は常にレバレント藤田と敬稱し居りしが其既に佛陀迦耶にて死去せしことを語りしに、皆痛く哀悼の意を表したり。我が手握にて食するを見ては印度化したる日本人と笑ひ興ぜり、多年齋食を以てほこり來りし我、當時は尚ほ酒肉を用ゐざりしかば幸に基督敎徒との誹りは免れたらん、されど歸來菩薩の戒を破り、魚肉を食し、大慈悲の性種子を斷じ、恬として孝順の心なし、若し彼等我が今の所業を見ば將た何とか云はん、慚づべし恐るべし。

拾九日に到り許可の指令を得て直ちに仝所の大自在天の神祠に赴く、此祠は俗に淨飯大王嵐毘尼園より歸途、太子の安寧幸福を祈願せん爲めに來詣せしに、保母太子を抱きて入るや神像直ちに立て太子を禮拜せりと言ひ傳ふる所、夫れより西北に進むこと凡二哩ボンガンガの河邊にテラウラコートと稱する荒凉たる草林に達す。是れ實に迦比羅衛城の舊跡にして、方形をなしたる殘壁の基礎は昔時の規模の廣壯なりしを思はしむ。中央に半ば壞れたる練瓦石造の小祠あり、中にガネーシャの像あり、やゝ東北隅に偏したる部分に過半埋れたる溜池あり、是れ亡滅の際に當りて時の城主摩訶男一門の人々の塗炭を救はんが爲めに、石を抱いて沈まれたる庭前の池跡ならん、訪ふ人なきを幸ひ一匹の鰐魚時を得顔に游泳し居たり、此處より東北凡三哩ネグリフクなる所に一小池あり、其水邊に半折の阿育柱倒在せり。是處西域記の所謂人壽四萬歳の時に出現ありし羯諾迦牟尼如來の生地にして、此塔は其遺骨の塔前にありしもの、此附近西南の林中殘瓦纍々たる地はルリ王無數億の釋種を虐殺せし所ならんか、更らに踵をめぐらしてテラウラコートより凡三哩の南方ゴチフワなる所に到れば、阿育柱の上部土中より少しく顯はるゝあり、是人壽六萬歳の時に當り出現ありし俱留孫如來の廟前に、阿育王の建立せし高三十尺の石柱なるべし。其處より凡一哩餘東方やゝ小高き所に古蹟ありクダンと云ふ、釋迦如來菩提樹下に於て等正覺を成し給ふて正法宣傳に從事し給ひつゝあると聞き

父王は崇敬の念に堪えず、使を使はして其歸省を求め、自ら是を四十里の外に迎へて、會見聞法せられたるニャグローダ丘蓋し此處なり。猶附近にパトハなる處あり、太子諸王子と力を角し一箭に七鐵の鼓を徹し給ひたる古趾ならんか。

ハキン大佐は嵐毘尼參拜の便宜として、大象一頭に巡査一名を附し、印度に出づる迄貸與せられたりければ、意氣揚々として象背に駕しトリフワを發し、東方に進み、大小三個の河流を渡り、二十一日午前十一時、今を去ること二千五百三十一年の昔三界の大導師四海の讃歎する佛陀、摩耶夫人の胎内を出でゝ天上天下唯我獨尊　三界皆苦　我當安之の初聲を揚げ給ひし世界唯一の聖地に達せり。地は迦比維城趾の正東凡十五哩の處にあり、綠樹繁茂して一小丘をなす。佛陀迦耶に比して雅致深し。南麓に小さき水溜りありしかと思ふ、東方登り口に惡龍の計にて折れたりと稱する阿育柱あり、大王の巡拜を記せり、如來の御足の接せし聖土何ぞ土足に蹂躙するに忍びんや、靴脱ぎ捨て林に入れば煉瓦石造の小祠二箇あり、左方なるは過半壞滅し内には荊棘生ひあり、右方の祠は西に面して戸に鍵す、從ひ來りし堂守の婆羅門戸を開けば水氣滿ちて肌にせまる、狹き石階を下り入れば、三疊敷程の薄暗き室内に、樹枝を支へ給ふ佛母の右脇より半ば出て給ひし嬰兒、大梵帝釋今や雙手にて受けんとしつゝある苦深き石壁あり、傳に曰ふ佛の母胎を出て給ふや、妙なる天鼓空に鳴り天人踊り歌ひ喜び舞ひしと、天人猶ほ斯の如し、況んや大苦海に投げ捨てられたる萬物の救ひの道に到る時に會へるをや、實にや禽獸は其聲を潜め、病めるものは療せずして自ら癒へ、地獄の熱火は失へりたりとは僞ならじ、嘻受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ふ、何の幸ぞ今亦此靈跡に合掌三拜するを得、宿世に殖へたる妙因によるか、南無久遠實成本師釋迦牟尼佛、南無平等大慧一乘妙法蓮華經と、五體投地三禮し、思はず歡喜の涙を流したりき。此祠土人はマヤデビーと尊稱して、ハキン大佐我出立の際も土足にて入室することを禁ぜし程にて、堂守は象丁巡査等は回教徒たるを以て入堂を許さず、門外にて頻りに其來歴を說き居たり。林を出でブラグシーナを守り、右側を迂回せしに周圍は五丁に過ぎざるべし。印度と云へば直に佛教を聯想し來るも、既に七百年前教徒は五天に絶滅し、近年ダルマパーラ氏大菩提會を組織し、其再興を計り居るも未だ何等の勢力を有せず、成道說法入滅の聖地には佛僧滯在すと云ふのみにて、其管理は依然印度教徒の手に在り。然るに此出生の靈場は凡二年間西藏の喇嘛滯在せし事ありしも、土地の炎熱に犯され永留する能はず、其後一人堂守の僧さへ無く、牛馬の糞尿を恣にす有爲轉變諸行無常の理りは聞きつゝも、思ふて今に到れば弟子等豈悠々として徒らに遐劫の微緣に甘んずるに忍びんや。たとひ一乘の船に乘ずるも心内名利の暴風烈しく吹きて泰山を覆し、意中の煩惱は愛慾の激浪を廣海に起す、更に精進櫓棹を加へて速かに所止に至り、一天四海皆歸妙法、令法久住廣宣流布せずば何を以てか佛祖に對せんや。

其日は南方凡三哩なるバガバンプラに宿し、翌廿二日例の如く大象に駕して南方二十哩ノーガー停車場に赴き、ガンデス河北を經てダーヂリンに直行し、爾後八ヶ月シキム東ベンゴル、ビルマ、雲南、安南の諸地方佛教國を歷訪して、本年四月恙なく故山に還り故舊と會し、從來或は宵月となり、或は曉月となり、或は暗夜となるにより、烏兎の經過するの速なるを知り、旅路の長きを覺へつゝ、辿り來りし十八ヶ月の艱難も忘れ果てゝ共に樂む身となりぬ。思へば元來薄志弱行羸弱多病の我イラン不毛の曠原にさまよひ、ヒマラヤの高峰風寒き雪中に埋れ、患難迫害飢餓凍餒疾病あらゆる困苦に遇ひながら、再び歸朝することを得たりしは、是れ自らの力にあらず、我智慧は牛馬に類し、威儀は猴猿に劣る。然れども仰ぐ所は釋迦佛、信ずる法は法華經なり、藤は松にかゝりて千仞を攀づ、我身是れ藤、一切衆生の福緣力は其根を肥し佛力法力感應道交して此妙行を成ずることを得たりしなり。願くば讀者諸氏暫く心を靜かにして、思を一佛陀の上に集注せられんことを。

法華經第七に云く、我滅度の後に於て應さに斯經を受持すべし、是人佛道に於て決定して疑あることなけむ云々

此文こそ世にたのもしく候へ、此等の樣を思ひつゞけて觀念の床の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし我身の内に三諦即一、一心三觀の月くもりなく澄みけるを、無明深重の雲ひき覆ひつゝ、昔しより今に致る迄生死の九界に輪ること此砌にしられつゝ、自らかくぞ思ひ連ぬる。

立ち渡る身のうき雲も晴れぬべし
たゝのみのりの鷲の山風

《日蓮上人身延記》



講義

# 歎異鈔

## 第五章

近角常觀

親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝいそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、何れの衆生かしづめりとも、神通方便をもて、先づ有緣を度すべきなりと云云

此章は念佛は如來廻向にして行者の方よりは不廻向であるといふことを、きはどく父母孝養の上にかけて示したまひたのである。從て一面よりは我等は自力で父母孝養も出來るものではない、如來廻向の大悲によりてこそ、生々世々の父母兄弟をもたすくることが出來るのであるといふことが示されてある。故に結局あらゆる道德倫理は信仰によらなければなりたゝぬといふことになる、故に一面此章は所謂倫理已上の信仰といふことを示されたこととなる。抑々歎異鈔の特徵はすべての問題につきて、きはどく極端の言語を以て言ひあらはされた點にある。親鸞聖人の信仰は如何にも絶對的にして一點の曖昧を挾む餘地がない、されど聖人御自身の筆にあらはれたるときは、其寬容偉大な人格を通して現はるゝ爲に頗る迫らざる有樣がある。敎行信證は多く經論釋の文を類聚し

て、其間々に簡潔なる御讃仰の言を加へられたるものゆゑ、餘程味はねば其深き御意が分かりかねる。銘文や、一多證文や、唯信鈔文意は如何にも分かりよけれど、穏かなる御言であるゆゑにきわどき點がわからぬ。愚禿鈔には最もきわどき點を示されたれど言ひあらはしが角だゝぬゆへに矢張り圓滿である。此きはどき點を反面より著しく角だてられたるは即ち化身土卷なれど、日常生活の上にあらはれた點を拜見したてまつることが出來ぬ。しかるに御消息集や、末燈鈔の上では、其絶對の信仰が生活の上にあらはれた點がたしかに窺ふことが出來るか、特に其點を直に口づから御話をなされた御語は、此歎異鈔に於て明らかに拜むことが出來る。これは歎異鈔の著者の人格と筆致とが、此きわどき絶對の態度を角だてゝ著しく闡明するに與りて力あることなるべけれど、もと〳〵親鸞聖人の絶對的信仰が遺憾なく發揮されたるものである。故に我々には歎異鈔がなかつたならば、其きはどき點を角だてゝ日常生活の上に味ふことは出來ぬ。而して此章の如きは最も其特徴のあらはれたものである。

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださうらはず、

この一言は味はへば味ふだけ深き意味のある言葉である。まづ文字の上より從來人の氣附きたる通ほりを申せば、親鸞聖人の宗旨は自力の念佛をゆるされぬ、たとひ父母孝養の爲めなりとも、父母の冥福を祈るために一遍の念佛にても申した事は無いと申ふされたといふ。それ故昔より此章を讀む心持は、眞宗では追善廻向のために念佛を申さぬといふ極特別な意味にのみ了解したらしい。こは聖人の信仰より來りたる結果なれど、今は其源にさかのぼりて、信仰そのものを味はゝねばならぬ。即ち聖人の信仰にては、念佛は如來廻向の御慈悲なれば、一點なりとも自力廻向の心なき故に、如來の御恩を喜ぶ外に何も無い。たとひ父母の爲めなりとも我等がつとむべき念佛はない。勿論我等がつとめた爲めに、効力があるものなればつとめもしようが、一點我等の力なき故に、如來廻向の念佛を頂きたる次第なれば、如來の慈悲を喜ぶ外に稱へ樣なき念佛であるといふ事を示されたのである。

又近頃は青年にして歎異鈔を渇仰するものにとりては、此言葉は實に心地よく倫理以上の宗教を言ひあらはされたるものとして尊ぶ次第である。此時は念佛といふよりも父母孝養といふ事に力を入れて、父母孝養よりも念佛が大切であるときはどく言ひ放ちたる意味に了解するのである。基督教に、我は子を親より離さむが爲めに云云とある意味と暗合するものとして、基督教者自身が、親鸞聖人の信仰の絶對なるに驚愕せる次第である。是亦慥かに此言葉の内に含まれたるものにして、一本に「親鸞は父母孝養のためとて、念佛一遍にてもまふしたることさふらはず」とつくりたる如きは、此方の意味を強める事になる。即ち親鸞は父母孝養のために念佛一遍てもまふした事はないとの意味となる。されど是亦信仰に力を入れて、倫理と衝突するかの如く、甚だしきは忠孝の思想に反抗するのが信仰であるかの如く誤解するものがある。こは決して其樣な意味ではない。そも〳〵信仰は佛陀によりて助けられる事である、佛陀の力の他は何物によりても救はれぬ、



決して父母を疎にする譯ではないが、信仰の一段に至りては父母の力といへども如何ともすべからざる事である。夫れ故に又我等は父母の爲めにかはりて信仰する事も出來ぬのである。抑も〳〵佛教に於て南無佛と口を開きて三寶に歸命するも乃ち此意味である。親鸞聖人が化身土の卷に菩薩戒經をひきて、「出家のひとは國王に向ひて禮拜せず、父母に向ひて禮拜せず、六親に務へず鬼神を禮せず」と申されたも此意味である。斯く子として親の力によりて救はるゝ事も出來ねば、子として親を救ふ事も出來ぬ、信仰の問題は倫理以上である。なほ一歩進めていへば、我々は父母に孝養をしたいが、理想的にいへば我々の力で父母孝養すらも出來ぬ人間である。親が如何程六道にまよひつゝあるとも、いかんともすべき力はないのである。此の如き父母孝養の出來ぬものでも、唯此佛の力のみあつて救ひ下されるのである。此佛の御力が即ち念佛である。此佛力によりて救はれてみれば、其佛の力で遂に生々世々の父母兄弟即ち一切衆生を救ふことが出來るやうになるといふ唯一佛力を力として、我身を謙虚にする親鸞聖人の絶對的信仰を遺憾なく言ひ現はされてある。

以上は一面より此一言を味はうた次第である。前者は如來廻向の念佛なれば父母孝養のためとて一遍にても申されぬとの意、後者は父母孝養も及ばぬ身なれど、たゞ佛力によりて救はれてこそ、生々世々の父母孝養も出來るといふ意、畢竟同一の意味である。これにて充分親鸞聖人の絶對の信仰をいひあらはすことを得たが、猶ほ今世の多くの人が親鸞聖人を理解する上に於て、充分ならぬうらみがある。前にも申す如く親鸞聖人の信仰を恰も基督教の信仰の如く、何と無くすさまじく大膽なる斷言をきはどくすつぱりと一世に宣言されたるが如く感ずる事である。こは慥かに聖人の信仰より來る自然の結果としてあらはれ來る顯象にして、肉食妻帶の宗風の如き、外面より見れば斯の如き觀察を下すも無理は無い。然かれども聖人の信仰的内面に立到りて見れば、これまた前にも申すが如く頗る自ら謙虚にして、唯佛力を讃仰したまへる一點私なき、溫潤玉の如く春風の如き信仰より流れ出てたる結果たる事を忘れてはなりませぬ。

さて聖人が斯の如き柔順、謙虚私なき信仰をいだかれたる源は、法然上人の南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の御をしへたることを忘れてはならぬ。外面觀察より見れば、法然上人は何の事はない、念佛ばかりを稱へて、何等の計畫もなく、人に反對することもなく說法したまひた。從つて父母孝養の爲めに念佛一遍にてもまふしたる事さふらはずなどいふ圭角ある言葉はおくびにも申されぬ樣におもへる。成程法然上人は德行たかくして、朝廷も人民も上下師表として渇仰したる次第なれは、其德化の著るしきは申すまでもなき事なれど、其德化は單に修養上の力によりて鍛へあげて、圓滿になられたのでは無い、其源は上人の内心に於ける絶對の信仰南無阿彌陀佛にある事を忘れてはならぬ、そは上人の信仰の骨髓を示されたる撰擇集に遺憾なく發揮せられてある。

そも〳〵撰擇集の書き方を見るに、實に明了にして條理井然として亂れず、且つ念佛の一行を主張したまへる其態度の絶對なる事、實に比類なき有樣である。是もとより自己の經驗

より來れるものにして、上人が念佛を信じたまふ信念の告白なれど、頗る直截明瞭なるものである。拾六章段悉く或は道綽禪師聖道を捨てゝ正しく淨土に歸するといひ、或は善導和尚雜行をすてゝ正行に歸すといひ、遂に彌陀如來業行を以て往生の本願とせず、唯念佛を以て往生の本願となすといひ、是より以下三輩念佛往生、念佛利益、特留念佛、觀經の攝取念佛行者、彌陀經の證誠念佛等絶對に念佛を主張してある。當時全盛の聖道門に對して、捨閉擱拋の文字を用ゐて、一點も許るされぬ所はおぼえず禁を正さしむるものがある。當時の南北の學匠が憤慨して遂に上人を讒訴するに至つたもこれからである。聖人が斯く迄も主張したまふ所以のものはもとより上人が聖道門を變行して自ら捨閉擱拋せられたる經驗そのまゝにして、いかに迫害に出あふとも、これをいはずに居られぬ信念があるからである。

其信念の源は則ち撰擇本願念佛である。撰擇集に彌陀如來餘行を以て往生の本願となさず、唯念佛を以て往生の本願となすといふ事を委しく説明して、かの諸佛の土に於て或は布施を以て住生の行とするあり、乃至或は持戒、或は忍辱、或は精進、或は禪定、或は般若、乃至或は起立塔像飯食沙門及父母孝養、奉事師長等種々の行を以て往生の業とするあり、或は又專ら其國の佛名を稱して往生の業となすあり、即ち今前の布施持戒乃至父母孝養等の諸行を選びすてゝ、專稱佛號を選取す、故に撰擇といふなり、とある。既に此の如く彌陀の本願それ自身に於て、父母孝養をゑらびすてゝ往生の行となさず、唯念佛の行をなして我等が爲に誓ひ給ひたのである。此撰擇本願を法然上人より直々承られた親鸞聖人が「親鸞は父母孝養の爲めに念佛一遍もまふしたる事いまださふらはず」と仰せられたは、唯法然上人の仰通りを信受したまひたる謙虛なる信仰である。此彌陀の本願それ自身に於て餘行をすてゝ唯念佛の一法をゑらびとりたまひしが故に、念佛すなはち如來廻向の行である。撰擇集一部は念佛は如來撰擇本願の廻向にして、我等自力の廻向の行に非ずといふ事を絶對的に示したまひしに他ならぬのである。本鈔第二章に彌陀の本願まことにおはしまさば、乃至法然のおほせそらごとならんや、と仰せられも此處である。行卷に撰擇集開卷の文と終り三選の文とをあげて撰擇集一部を引用し、聖人嘆じて曰く、明かに知んぬ、是凡小自力の行に非ず、故に不廻向の行を名づくるなり、大小聖人重輕の惡人、皆同じく齊しく撰擇大寶海に歸して念佛成佛すべし、とのたまひてある。是實に念佛成佛是眞宗の眞髓にして、聖人正信偈に法然上人を讃歎して、眞宗敎證興片州、撰擇本願弘惡世、と中心の感謝をさゝげたまひたのである、斯く撰擇本願を見出し給ひし法然上人は、其本願に從ひて念佛の一行に入り給ひし如法なる信念は、勢ひ淨土門の開闢となりて、絶對の主張を生ぜざる可らざるやうになる。其の絶對の敎化を蒙りて從順に如來大悲の本願力回向を信受し給ひし聖人の謙虛なる信仰は、知らず識らずの間に自然に法然上人の仰せ通りに從はるゝ事になる。化身土の卷に二善三福は報土の眞因にあらずとある。此の三福は即ち孝養父母奉事師長等である。斯の如く法然上人の仰せ通りを言ひ表はせられたる信仰が、即ち此章の上に人生に於て活きた言葉として。親鸞は父母孝養のために一遍にても念佛まふしたることいまださふらはず、といふきわどき絶對大悲を宣揚し給ひたる御言葉となりてあらはれたのである。



# 慶嘆

## 六　信樂開發

信卷別序の最初に、

夫れ以れば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す、眞心を開闡するとは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり、

と云はれた。信仰は我々が求めたので來るのではない、佛陀の慈悲によりて與へらるゝのである。佛陀の慈悲は南無阿彌陀佛である、光明である。此名號の父と光明の母とによりて生み出された信心である。これによりて如來の慈悲をば利他の願海とも名ける。利他といふ所以は、我等から進んで救はれるでなしに、佛陀から救ふて下さるのである。そこで他力といふ意味は上即佛陀から手を下し玉はるので、この佛陀慈悲の御手が我等にとゞいて下さつたところが信仰である。換言すれば絶對と相對との一致である。この一致といふことを半佛半人の持合と考へるから、絶對他力の信仰が味へぬのである。眞實の信仰の上では、佛と人との持合ではない、勿論南無阿彌陀佛は佛の物なれども、それが我等の口により稱へらるゝところの信心である、信仰はまた固より我等の心に出で來るに相違ないが、それが全く佛より來りたのである。であるから絶對相對の一致といふは水と油とを一つにした如きではない、我等の信仰は佛力の外にあるにあらず、佛心と凡夫心と兩者の寄合にあらずして、廣大の佛の惠が丸々我等に顯はれて下さるのである。これが絶對他力の信仰の妙味である。

我等の心中に佛陀の眞心が到達して恰も蓮華の開くるが如く、我が心が開けてしみ〴〵と佛陀を喜ぶ心が生じ來るのであつて、是全く佛陀の偉大なる力である。我心いつとなく佛の慈悲が有難く思はれて疑はんとしても疑はれず、眞に心の開けて來たのは、自分が斯く有り難く思はんとして思はれたのでなく、全く如來選擇の願心より發起せしめられたのである。親が子を可愛〳〵と常に斷へず思ふて居て下さるので自然に子供の心に親は有り難いといふ心が起つたのである。親鸞聖人が「夫以れば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す」と云はれたのは、一寸聞くと何でも無いようであるが、斯くの如く云はれるのは決して偶然ではない。私自分のことを回想するに、或は宗敎上の事を憂ひ、或は友人の

事を憂ひ、種々なる人生實際の出來事に出逢ふて種々に考へた、それが爲に永い間自分の胸中に安心が出來ず、大なる苦に陷つた。何とかして安心を求めたいと悶へに悶へた最後に於て、佛陀の惠が私にわからして下されてアヽ有り難いと喜んで安心することが出來たのである。於是つら〳〵思ふに、久しい昔から私に種々に惠をかけて居て下された其佛の眞實の願心念力が、私に屆いて下されたのであつた、よりて思ふに信卷は親鸞聖人の實驗の直寫である、聖人の胸中には人生百般の出來事皆我を導いて下さる如來願力の御計らひであつて、釋尊在世當時の王舍城の大悲劇も外へ遣ることは出來ぬ、皆色々と手を回はして凡ての人間を信仰に入るべく導いて下されたのである。「眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より發起せり」と申されたのである。乃て我身が回り〳〵て佛の惠に入つて有り難い心になつたのは、偏に佛陀願心の賜であると感謝して居られたのである。已上の如來選擇の願心と大聖矜哀の善巧とを喜びたまふ意を和讃に

釋迦彌陀は慈悲の父母
種々に善巧方便し
我等が無上の信心を

と讃歎せられてある。我等は此和讃を口先で誦んで仕舞つてはならぬ、或は財産を失ふて驚いて信仰に入るもあり、愛妻愛子を失ふて驚いて信仰に入るもあり、或は一家が平和で樂しいところから信仰に入るもあり、其他凡て人生百般の出來事、小にしては一家の不和より大にしては世界の紛擾までが、必や終にはこれによりて目を醒まして信仰に入らねばならぬように餘儀なくせらるゝは爭ふべからざる事實である。かく人生の出來事から餘儀なくせられて佛の惠の懷に入らざるを得ざるようになつて、大に喜ぶことを得たるは、畢竟は久しい以前から釋迦彌陀二尊の慈悲の父母達が、種々の善巧方便を以て我等に廣大の惠を向けて居て下さつた佛陀の念力の顯はれである。此方便といふに就て世間には嘘も方便といふ諺がある、佛敎專門の方でも權化方便とか、善巧方便とか種々の名を附して方便を論じて居るが、私が考ふるに何れも皆我等を導いて佛陀の惠に入らしめんといふ慈悲善巧の手段であるから、善巧方便の外無いと思ふ、蓮如上人御一代記聞書に

方便をわろしといふ事はあるまじきなり、方便を以て眞實をあらはす廢立の義能々知るべし、彌陀釋迦善知識の善巧



方便によりて、眞實の信をば得ることなるよし仰せられ候。

又末燈鈔にも

この信心を得ることは、彌陀釋迦十方諸佛の御方便より、賜はりたりと知るべし、然れば諸佛の御敎を謗ることなし、餘の善根を行する人をそしることなし

と云ふてある。動もすると何氣なしに信仰を發したる如くに思ふが、其實は大聖釋尊を初として諸佛菩薩皆同心にて廣大の惠を我等に與へんが爲の善巧の計らひによりて信仰に導いて頂くのである、これに氣附かぬから自分で信仰を作らんとする過誤に陷りやすい。よりて信卷には又

然るに常沒の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成し難きには非ず、眞實の信樂實に獲る事難し、何を以ての故に、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に因るが故なり。

と云ふてある、如來廣大の威力が加はつて下されたから、信仰に入つたのである、廣大の智慧の御力が加はつて下されたから眞心を獲たのである、我れ自らの力により作りたる信仰にもあらず、偶然に生じたる信仰にもあらずである。私如き淺間敷い罪業深重煩惱熾盛の胸中に、佛の惠を喜ぶ心が生じ來つて、稱名歡喜することの出來るのは、全く佛陀の眞實から來つたのである。この信仰を金剛不壞の眞心とも眞實の信樂とも名けるのはこの故である。然るに佛陀の眞心から來つたてなしに、自心に佛陀を作り出して、之に對して有難く思はんとする如き、或はまたこの心中の佛陀を辿りて、善に進まんとするが如き、元來が凡夫の心であるから、眞心とも不壞ともいふことが出來ぬ。唯計らはずに佛の惠みを有り難いと頂く信仰のみが、顚倒ならず虛僞ならざる眞實の信仰である、

其信仰の內面の狀態は如何といふに

一面は我身が惡いものであるといふ罪惡觀である。
一面は佛の惠を喜ばして貰ふ慶喜心である。

善導大師はこれを

一には決定して深く自心は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に沒し常に流轉して出離の緣ある事なしと信ず
二には決定して深く、彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して疑なく慮なく彼の願力に乘じて定て往生を得と信ず

と云はれた。これを古來二種の深信即ち機の深信、法の深信と名けてある。今此實際の心中をいふて見ると、譬へば監獄の

囚人が一回ならず二回ならず犯罪に犯罪を重ねて度々入監して苦しんで居る。囚人の心情を察して見るに、どうかして こゝを出たいものであると思ふて居るが、どれ丈思ふても出ることが出來ぬ。乃て如何なる兇惡のものも出獄の後は改心して立派に社會に立ちたいものである、此次に愈々監獄を出たら改心しやうと思ふて居る。これを他から考へると如何にも尤な考へである、尤ではあるが然らば果して其囚人が社會に出たならば、立派に改心が出來るかといふに、實際はそうはいかぬ 囚人自心は改心して立派にやるつもりても、先づ自己の罪惡を蔽ふ虚榮心の爲に、成るべく他が身の上を知つてはならぬと世間を狹く見て、百方心配してそれが爲に業務も手に着かぬ、又親に對してすら隔て心を以て向ひ、親も寄せ附けて呉れぬだらうと思ふて、親の處へ歸ることもようせぬ。親許へも歸らず、働きもせず、世間と隔てゝ苦しむから、遂に復惡事を犯して、監獄へ舞ひ戻つて來るといふようなものである。信仰問題も亦此の如くである。常に云ふ如く私の信仰て云ふてもそうである、自分では善くならねばならぬ、人が此方を惡く思ふても、此方では先方を惡く思ふてはならぬ、心を淸くせねばならぬ、誠實でなければならぬと思ふて、朝夕に誓つて見たり。日記を書いて見たり、一日どうか善くしやうとかゝつて居ても、夕方になつて見ると駄目である、一日はどうかこうかやつても翌日は駄目であるといふ次第で、今日こそ〳〵と氣を張つて居るが、一年中とう〳〵駄目に終つてしまひました。恰かも囚人が此の次には改心せん、此の次には改心せんと勤めて見ても、如何にしても能はぬと同じことであります。どれ丈企てゝも善くなり得ぬ。右に向つても心が隔てる、左に向つても隔てる、右にも左にも動けぬ、善導大師の實驗の如く、右からは群賊左からは毒蛇、その間にまた異學意見の爲めに惑亂せられて一層こうしたら、あゝしたらと一向心がきまらぬ、右にも左にも進退きはまりた狀態をば世人は之れを稱して罪惡觀といふたり、或は從來の言葉で之れを機の深信といふものもあるが、それは誤りである。一寸考へると「我身は罪惡のものなり出離の緣あることなし」といふ善導大師の告白は此の苦しい境遇を云ふたものゝ如く思はれるが決して左樣ではない。今日學生抔が自分は罪深きものであると苦しんで煩悶して居るものが少くない、又信仰を求めて道の話を常に聞いて居るものでも、我が如きものは迚も救濟には預られぬと歎いて居るものがある、それらは煩悶狀



態で決して罪惡觀ではない。彼の囚人が、自分は如何にしても駄目であるが、それてもどうかしてよい方法を以て改心したい、或は大發明てもするか、奇拔の行にても出てゝ、金設けてもして好い境遇を開きたい、善くなりたい、成功したいとかういふて居るうちに、つい又第二の犯罪をすると同じ道理である。學生も信者も我身は罪深いものであると如何に思ふてもそれでは安心して居られぬ、唯歎いて日夜苦しむばかりである。彼の千仞の斷崖から落ちかけたものが草の根や木の株を攫んで、立ても居ても居られぬ思ひで自力を出して頻りに苦しんで居る如き心地である、未だ信仰とは云はれぬ。囚人がどうかして成功したい、何とか爲ねばならぬ、親許に歸るにも好結果を握つて歸らねばならぬ、假令出來ぬまでも爲さねばならぬと思ふのは、未だ親の心が解らぬのである。

そこて一番進んて其監獄の囚人が、如何にして安んずることを得べきかといふに、何も他の事はない親の心を知らして貰へばそれでよろしいのである。普通の囚人も親を全く知らぬとは云はぬが、親は私如きものを一向振り向いて見てくれませんといふのが多い。これは世間でも神も佛も有りはせぬ、人間とても皆溫かい情なぞは無いものであると、かういふ風に思ふて居るのは此囚人と同じ心持である。是等は餘程ひどいのであるが、一歩進むと少し氣が付いて神佛でなければならぬ、人間は皆罪惡のものである、どうしても人間以上の或るものゝ力に依らねばならぬといふて居る。然らば此ものは眞正に佛陀が解つてあるかといふに決して解つて居らぬ。これは恰も囚人が親は私如きものを憐れんで下さる、自分に如何なる間違があつても、それをいろ〳〵と善く思ふて下さるが親てある、いかなることがあつても捨てゝ下さらぬ有り難い親てあると云ふて居るから、そんならば眞實親が解つてあるかといふに、口には親は有り難いといふて居るが、心底には親の眞實が未だ解つて居らぬ。其の證據には直に親元へ歸らぬ、何故かと尋ぬれば親は寄せて下さるけれども、チットは善くなつて歸らねば濟まぬ。立派な衣裳でも着て歸らねば面目がない、どうか世間の面目をよくし土産でももつて歸りたい、今の處では如何にも恥かしいとかういふ氣てある、それだから直に歸られぬ。今日の信仰問題でもこれと同じ筋道に滯つて居るものが少くない。自分は如何にも惡いものであるが佛陀は此の如きものを助けて下さる、實に有り難いと口では云ふ

て居る、或は又唯の唯である、自分は何にも入らぬと云ふて居る、而も心底から眞實自分を惠んで下さる佛陀が有り難いといふことに氣附いて居らぬ、唯自分の心を取り立てゝ此の如く思ふて居る丈のものが多い。「疑なく慮なく彼の願力に乘ずる」にあらずして、彼の願力に乘ぜずして自ら斯の如く思ふことを以て我れ得たりとして居る、一面には無有出離之緣と云ひつゝ尙、どうかして出離し得るが如くに思ひ、一面には無疑無慮乘彼願力と云ひつゝ、尙疑ふまじと慮を用ゐて大悲の御親の力に依らぬ、全く似て而も非なる信仰である。

然るにいよ〳〵如來の廣大の御惠を聞かされて見ると、何かなしに一すぢに如來の御惠に感泣して喜ぶより外は無いことになる、こゝが眞正の信仰の極致である。囚人の例にして見ると親は汝如きものは失敗墮落の不埒者だから、歸つて來るなてなしに、「我如き不孝ものを晝夜少しも忘れずに待つて居て下さるゝのであつたか」と、眞に親の心を聞かされて見ると心の奥底からアゝ有り難いと喜ぶ計りである。此時に罪があるから歸られぬの、衣裳が惡いからの、土産が無いからのと云ふて居る餘地は無い、直に飛んで歸る計りである。抑善くなれると思ふて居るのは善くなれぬ所以である、既に罪惡に陷つたものが善い加減に自分の力で立派になれると思ふからいかぬのである、眞實に自分の惡いことに目醒めたものは、自分は仕ようないギリ〳〵である、崖の下に落ちて仕舞ふた仕方のないものである。親はそのようなものが立派になつて歸らうとは決して思ふて居らぬ、唯もう何かなしに直に歸つて來よと云ふて下さるのである、いよ〳〵崖の下へ落ちるより仕方なきものゝ上にとくより一佛名號の繩が下つてある故に煩悶の手を放つことが出來るのである。唯信鈔に

たとへば人ありて高き岸の下にありて上ること能はざらんに、力強き人、岸の上にありて繩を下ろして、この繩にとりつかせて我れ岸の上に牽きのぼせんと云はんに、牽く人の力を疑ひて繩の弱からんことを危みて、手を收めて之を取らずば、更に岸の上にのぼることを得べからず、偏にその言に從ふて掌をのべてこれを取らんには即ちのぼることを得べし、佛力を疑ひ願力をたのまざる人は、手を收めて繩を取らざるが如し、菩提の岸にのぼること難し、たゞ信心の手をのべて誓願の繩を取るべし、佛力無窮なり、罪業深重の身を重しとせず、佛智無邊なり、散亂放逸のものを捨つることなし、たゞ信心を要とす其の外をばかへりみざるな



り。

と云ふてある。繩につながれよと云ふ如く佛が繩さげてつかまへて下さるから、自分が悶かゝずとも手が放される。悶かくのはまだ罪惡の凡夫といふことに慮榮心がまつばるからである。自分も惡いものではあるが、人もまた善からぬものであると思ふのは、未た自分は至極の惡人なりと思はぬからである。親の自分に對する慈悲の廣大なることを思へば、今までは親を忘れて、親の惠に氣附なかつたのであつた、親が知れぬから曠劫以來昔から今日まで、之が爲に迷ひ之が爲に流轉して來たのであつた。自分が力味んでやつてもどんなことがあつても、此三界の牢獄は出られぬのであつた、此の如きものを捨てずして直に歸り來れと喚び玉ふは、大悲の御親計りである、あゝ有り難い、實に親の惠が尊いと氣附いたところで、始めて安心して苦しむことが無くなる、そこで心から眞の罪惡觀が起るのである。

此の如く親の惠に氣附く所以のものは、獨り考へて氣附くにあらず。父親は寄せ附けぬと怒る、母親は歸つて來よ詫して遣さんといふ、親戚朋友からは老親が心配して居る、早く歸つて來よといふて勸めてくれる、それが爲に囚人の心に成程親は有り難いといふ心が起る、こゝが所謂「信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり」といふところである。初まり口は囚人が、親が今のように叱つてよこしても、其言辭を大層苦にして、親の惠といふ點は一向解らぬ如く、釋尊が「唯五逆と正法を誹謗せんをは除く」と云ふを聞いて、我が如き五逆の罪人は到底助からぬと力を落すか、若くは母親が歸つて來いと云ふから自分は惡くてもよいのだと云ふて居るが如く、我は罪惡深重のものなれども、佛は之を許して下さると思ふて居る、何れも過ちである、親心が解からぬのである。親の有り難味の解らぬものは仕事に精出しもせぬ、惡事もやめぬ、左も無くば氣兼して苦しんで居る、眞に親心が解つて來ると叱られたときも眞實叱つて下さるのは親計りであると喜び、愛して下さるときも、我が如き不孝ものをそのように云ふて下さるは勿体ないと、叱つても愛してもどちらもこちらも有り難く頂けて何の遠慮も會釋も無く親の家庭に歸つて行く。

信仰問題も亦此の如く大悲の御親の惠の聞えた瞬間彼の願力に乘じて一點の疑慮もなく、定めて往生を得と安心する、これが信樂開發である。身は鐵窓に在つても心は親の處に歸つ

て居るのが所謂正定聚である、即得往生である。これを和讃に

超世の悲願きゝしより
我等は生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど
心は淨土にすみあそぶ

もー一ッ云ふべきことは囚人が在監中は、常にひもじく感ずる、どれ丈食ふても足らぬ、又何事にも不滿足であつて從つて仕事が苦勞でならぬ。加之獄吏を見ること仇敵の如くであるから、獄吏からは尙不同情になる。信仰に入つて來ると精神が從順になつて來るから、獄吏からは自然に同情を以て扱はれる、不思議にも與へられたもので滿足もするし、仕事も樂しんで働くことが出來る。乃て假出獄の恩典にあづかるに至る。而も囚人そのものは假出獄になる抔とは夢にも思ふて居らぬから、それを申渡されたときは意外千萬であると非常に喜ぶ。反對に人間の計ひを以て改心を裝ふて一時謹慎をして立派になつて、刑期滿ちて放免せられても、社會へ出て見ると中心が開けて居らぬゆへ氣が隔てゝ身の置きどころがない、又再び監獄へ戻つて來ねばならぬやうになる、つまり身は放免になつても心が監獄に在る爲である。之に反して在監中に信仰に入つたものは、既に心は家庭に遊ぶのである、監獄を出づるや否やあゝ有り難いと直に飛んで親の家庭に歸つて行く、今我等も亦これと同じことである。此三界は監獄である、極樂は佛の親の家庭である、其一如法界の家庭から形をあらはして、親心を知らせんが爲に釋尊も十方の諸佛も其他の大聖達も此人生へ出現して下されたのである、我等此佛陀の敎を聞て、有り難いと喜ぶとき此世の監獄に在りて早く既に心が極樂の家庭に歸つて居る。乃て此人生の苦惱は苦惱でなく樂しんで人生の本務に從ふて行く、而して受け來つた る命數の過くるとき直に極樂界に入ることが出來る。以上述べ來つたる信仰內面の味は善導大師水火二河の譬喩の上に丁寧に示してあります、引合せて味ははれんことを望む。

大信心とは則ち是れ長生不死の神方、斷淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨心、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、硏速圓融の白道、眞如一實の信海なり、斯の心即ち是れ念佛往生の願より出たり。斯の大願を選擇本願と名く、亦本願三心の願と名く、復至心信樂の願と名く、亦往相信心の願と名く可き也。『信　卷』



## 七　大悲回向

前來屢述ぶるが如く、佛陀の惠が我が心に到つて下さつたところが信仰である。

私自分が大層苦しんだ最後に、成程眞に我れを惠んで下さる眞の親とも眞の朋友とも云ふべきは御佛である、あゝ實に有り難いと心が開け來りて見ると、如何にも自分は惡いものである、邪推深いものである。若し佛陀の御惠に氣附かずに我が心まかせにして置いたならば、如何なる兇惡の振舞にも出兼ねぬものであると自分が自分に宣告した。自分の本性が解つて見て、中心から慚愧心が起つて來たところに、此の如く自分の惡性なることを知らして頂くは實に有り難いと大に喜んだ、これ所謂機法の深信である、さて此の如き信仰には如何にして入るかといふに、昔から、斯く〳〵思ふのであるとか思はねばならぬとかと律法的に陷り、甚しきに至つては信仰最初の一念限り二種の深信がある、第二念以後は法の深信ばかりであるとか、或は最初の一念は法の深信ばかりで、第二念以後は機の深信が起るのだとか、種々に八釜敷く云ふと聞いて居つたが、私自己の信仰問題から云へば、斯の如き限つたことは云へぬ。あゝ有り難いといふ下に惡いものなりといふ心があり、惡いものなりといふところにあゝ有り難いといふ思ひが必ある。四年以前に黑田最勝君が信仰に入つたときには、これまでいろ〳〵と理屈を考へて、佛があるとか無いとかいふて佛陀を蔑ろにして居つたが、不圖したことから氣附いて來ては、もうたまらないて私のところへ出て來た。其樣子は非常である、今思ひ出しても同情に堪へられぬ、その時「自分は實に謗正法の大罪人である、今日迄佛陀無限の大悲に氣附かなかつた」と涙を流して懺悔せられた。又無漏田貢君が佛陀の惠に氣附かれたときはあゝ有り難い、私はこれでやるのだと大に力味んでやつて來た、其後兩君が同じ日に信仰告白をせられた時は、黑田君は障子を開けて入り來りえらい勢で「建仁第三の曆春の頃十九歳隱遁の志にひかれて源空聖人の吉水の禪房に尋ね參り給ひき」私は此間九段の求道會の座で佛陀の大なる惠に氣附かして頂いた、初めてこんな有り難いことに遇ふた、如何なることがあつても此喜を世の人に頒つことに一身を投ずるのだと、前に泣いた人が、此度は歡喜の餘り威張り出した。之に反して無漏田君は此度は私は永い間この有り難い聖敎を捨てゝ、耶蘇敎に入りたり抔

して佛陀に反いたのは寔に申譯がないと泣き乍らの懺悔であつた。強ちに泣いたが機の深信、喜んだが法の深信とも云へぬが、併暫く分ちて罪惡懺悔の心と願力感謝の心と云ふて見れば、此深信の二種の有樣は後先が無いといふことはこれで分明である、寔に濟まぬと思ふ下にあり有り難いと云ふて居る實際は一つものである。歎異鈔に

聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、偏に親鸞一人が爲なりけり、されば、そくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめし立ちける本願の忝なさよと御述懐さふらひしことを、今また案ずるに、善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に沒み、常に流轉して、出離の緣あることなき身と知れといふ金言に、少しもたがはせおはしまさず。

と云ふてある。佛陀の救濟を喜ぶと、自己は罪惡の塊なりと知るとは、一つであるといふことはこの文でも明白である。

和讃に「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず」とある、願の強いのは罪業の重いので知らるべく、我罪業深重の故に願力が手強くかゝるのである。佛の願力若し罪業を助けずんば、願も徒然である、力も虛設である、深重の罪業を救濟するから、願力が廣大無限である、此願力無窮と罪業深重との二つが一處に頂かせて貰へるのである。

此信仰の有り樣を、阿彌陀佛本願の文に、至心信樂欲生我國の三信とあらはしてある。之に就て親鸞聖人は信卷に於て一々字訓を施して、詳細に實驗的意義を表示せられてあるが字訓のことは、今一々之を云ふて居る暇あらざれば之を略して、唯三信の大要を述べて見ようと思ふ。先づ至心は眞實で佛陀に對してまことなること、信樂は疑なく佛陀を愛し喜ぶこと、欲生は佛陀の御許に生れんとの希望である。これを今日の信仰界の言辭で云へば信愛望の三といふてよからうと思ふ。乃て親鸞聖人の意で之を云へば、其至心の眞實は信の字に入り欲生の希望は佛陀を愛樂することに歸するから、三信が終に信樂の一心である、一言に云へば如來の直に來れとの玉ふ御言を一點疑なく、有り難いと喜ぶが信樂である。然らば何故に丁寧に三つに分つてあらはしたかといふに、此の如く疑の晴れる本は何であるかといへば、第一番が至心即ち誠實である。我々は誠實にせざるべからずと考へて誠實ならんとすればいよ〳〵誠實なること能はず。之を私の經驗で云ふて見ると、初めから自分は到底誠實になし能はぬと氣附いたならば、苦まずしてありしならんが、さりとて人として誠實にせずともよいと止むべきではない、どこまでも他に對しては好意を以てせざるべからず、誠實を失ふべからずと力味むから、それが爲に大に苦しんだのである、親鸞聖人は、

一切群生海、無始より已來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして、淸淨の心無く虛假諂僞にして眞實の心なし。

と云はれた、我等は遠く昔から誠實ならんとして得ざるものである。是に就て善導大師は、

外に賢善精進の相を現じ、內に虛假を懷くを得ざれ、

と云はれしを、若し律法主義に解すれば實行が六かしい故に、親鸞聖人は

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、內に虛假を懷けばなり、

と讀んで、我々は自性からが惡である、僞である、如何にしても眞實至誠なること能はざるものである。強て外觀を裝ふて僞善に誇ること勿れといふ意味に解釋せられた。我等は本來僞善のものである、如何にして中心誠實に爲し得ざるものである、而も此自己の不實僞善なることに中心より氣附く所以は、唯加來のみ眞實にてましますと頂けたからであつて、その時は我れ如き不實のものに對して、至誠を垂れて下さるは唯佛陀のみと仰ぐばかりである。

次は信樂である。即ち私の實驗では又どうか佛陀を信じたい、佛陀を愛したいと思ふても一向そうはなり得られぬ、私が苦しんだ時に、如何に他人を信じたいと思ふても信ぜられぬ、自分が信じたいといふ言辭の裏面はたしかに人を疑つて居るのである、信ずること能はずして疑ひつゝあるは、他に對して誠實になし能はざる所以である。如何に先方が惡くとも我れは捨てず、向ふに何事があつても我は之を疑はず、愛するが至誠眞實であるが、我れは悉く人を疑ひ隔てゝ居つた、自分は到底眞實になり得ざるものなるが。どうか世の中に向ふから疑はず、隔てぬものが無いであらうか、向ふが疑はずに愛してくれるものが無いだらうかと頻りに求めた。最後に此方から求めるには及はぬ、久しき以前から我れ如き惡しきものを眞に惡みつゝあるのが大慈悲の佛陀であると解つて來た信卷には

然るに無始より已來、一切群生海、無明海に流轉し、諸有輪に迷惑し、衆苦海に繫縛せられて、淸淨の信樂なし、法爾として眞實の信樂なし、(中略)一切凡小一切時の中に、貪愛

の心常によく善心を汚かし、瞋惱の心常によく法財を燒く、急作急修して頭燃を灸ふが如くすれども、衆て雜毒雜修の善と名く、亦虚假諂僞の行と名く、眞實の業と名けざるなり。此虚假雜毒の善を以て無量光明土に生れんと欲する此れ必ず不可なり。

と云ふてある。我等はどれ丈立派に行が出來ても、貪愛瞋嫌の心の爲に、侵されて、眞實の愛心が出て來ぬ。然らば如何にすべきかといふに信卷次の文に

如來苦惱の群生海を悲憐して無碍廣大の淨信を以て諸有海に廻施し玉へり。

と云ふてある。その廣大の淨心を廻施し玉ふ有樣は、次の欲生のところに於てよく味はるゝ。

欲生といふはどうかといふに、我々は信仰を得たい、往生の心を起したいと思ふても、此方から佛陀に向つて行く回向心は到底駄目である。私の經驗でいふと、自分は他に對して眞實なることを得ざるゆゑ、遂に互に疑ひ互に隔つるに至る。こんなことではいかぬ、此方から開いて行かねばならぬ、向ふから惡くしても此方から善くすれば善くなるのである、何時までも物を引合して居ても行かぬものであるとまで思ふても實際はそう／＼讓られぬ、此方のものを他に向け、自分の心を飜へして、他に讓る回向心は私には實は無いのであつた。信卷にこれを

然るに微塵界の有情、煩惱海に流轉し生死海に漂沒して眞實の回向心なし、清淨の回向心なし。

と云ふて置かれた。我々はまことにあさましいもので他に對して誠實なること能はず、却て向ふを疑ひ隔てる、此方からは如何にしても心を開いて向ふことが出來ぬ。此の如きものに對して佛陀は誠ならぬものに誠にして下され、疑ふものを疑ひ玉はず、向はぬものにどこまでも惠を向けて下さる、これが大悲回向であります。

抑廣大の慈悲の御親南無阿彌陀佛それ自身が、即眞實である。よりて「至心は至德の尊號を體とす」といふてある。眞實は即ち大慈大悲である。よりて「利他回向の至心を以て信樂の體と爲るなり」といふがこれである。いつまでも變らず飽まで悲んで下さるのである、此の如く如來の方から眞實慈悲を向けて下さるが回向心である。故に「欲生といふは即ちこれ如來諸有の群生を招喚し玉ふ勅命なり、即ち眞實の信樂を以て欲生の體とするなり、誠にこれ大小凡聖定散自力の回向に非ず、故に不回向と名くるなり」と云はれてある。それであるから至心信樂欲生の三信は、三あるにあらずして唯一つである。例せば水の清さは至心、なみ／＼と湛へてあるは慈悲即信樂。この清く湛へたる水を注ぎかけて下さるが、大悲回向とも欲生ともいふ、即招喚の勅命である、其廣大なる佛心南無阿彌陀佛をなみ／＼と注ぎ込んで下さるのが如來回向である。此の如き廣大の信仰であるから、相對的の言辭では何ともいふことが出來ぬ、善であるとか惡であるとか、頓に開けたとか、漸々に開けたとか云ふことが出來ぬ、如何なる形容詞を以てしても之を表すことが出來ぬ。よりて信卷に

凡そ大信海を按ずれば、貴賤緇素を簡はず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散にあらず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念にあらず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念にあらず、唯是不可思議不可稱不可說の信樂なり、喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し、如來誓願の藥の能く智愚の毒を滅するなり

と嘆美してある。大水の來り滿たすが如くであるから唯もう絶對不可思議の信樂である、大悲回向の信樂である、横超他力の信樂である。終に臨んで特に以て諸君の注意を乞ふことは、清き水をなみ／＼と我胸の中に注ぎ込んで下さるといふ點これ即大悲回向の信心であります。



▲求道學舍日曜講話題

| | |
|---|---|
| 朝家の御爲め國民の爲め念佛申し候べし | 十一月三日 |
| 歸命之意義 | 同　十日 |
| 選擇本願 | 同　十七日 |
| 深耕本願興眞宗 | 同二十四日 |
| 眞宗の教證 | 十二月一日 |

▲第二求道會土曜講話題

| | |
|---|---|
| 攝取の心光 | 十一月二日 |
| 恭敬心 | 同　九日 |
| 加威力 | 同　十六日 |
| 深重の大悲 | 同　三十日 |

▲第三求道會講話題

| | |
|---|---|
| 敬虔なる信念 | 十一月二日 |
| 名號のいはれ | 十二月二日 |

# 嘆詠

## 戀嬬娥

左千夫

高山のいはほに宿り夢疲れ魂は翔りぬ大空の上に

天門に風立ちしかば四方つ空四方つ國土に寄合にけり

蒼空の眞洞にかゝれる天漢あらはに落ちて海に入る見ゆ

ひんがしの空の一隅やゝ白みやゝ朱につゝ月出でんとす

小夜ふけて天の白つゆ山を包み星の青空上のみに見る

日を讃めば二十日の月を天の原の高山の上に迎へつるかも

月讃は神にしませば天の河ひた波踏み空渡らすも

生死の境を離れとことはに處女にいます月讀の神

まぼろしか夢かしら〳〵雲踏ます嬬娥の神を目のあたり見し

澄みとほる天の眞澄に肉むらのむくろ空しき思ひせりけり

### 行誡上人

おどろかすほどならずとも鳴子繩たえぬをみちの心ともがな

いつの間に昨日はすぎて今日もまた暮れむとすらん入相の鐘

淺瀨えしことをうれしと思ひしはまだふかゝらぬ悟なりけり（品川の海にて船のくつがへりて溺ひし時）

しるやいかに夜すがらによぶ三世の佛の御名は我名なりとは

すゝみゆく心の駒はうつむちのかげも月毛もおよばざりけり

我も亦をしとこそ思へをしと思ふいのちはおなじ命ならずや



## 新作舊作

増田甚

もちぬりし枝にとまれる小雀の逃れんとしていやまかれつゝ

晴るゝ日の空を流れてゆく雲をかへるべしとは吾が思はなくに

絶え間なくよせては返す大海の世は幾度かなりかはりけむ

夢の世と現の世との其の外に我れさまよはむ世を知れりけり

十年のち二十年のちも相會ひてこの日語らむ一人ともがな（友と寫したる寫眞の裏に）

繁き雨になやむとかねてのたまひし君を如何にと夜の雨きく

五月雨に苗を植ゑけむその稻を刈りほす迄に逢はぬ君かも

世の中に哀は多きそがなかの父なきあとに生れたる兒か

# 時報

## 熱田

九月二十九日京都行の機會を以て尾張國熱田及附近に立寄りて、豫て約束しける住田智見師を初め同信の御同朋に遇ふ事となりぬ。三十日朝熱田停車場に着し、諸氏の迎えを受け同町興德寺佐久間寶順氏の許に宿りぬ。抑々同地は住田師を中心として、佐久間、澤、伊藤等の諸師青年の間に信仰を鼓吹し、殊に青木兵二郎氏の如き自ら率先して熱心なる信仰に入り身を以て人を帥ゐ、常に清新なる法話會を開かれつゝあしが、此度び此等青年の人に初めて相見ゆるや一見舊知の感あり。同日午後同町附近寶田村祐誓寺住田師の寺に行きて講話會を開く。集れる人々孰れも住田師を通して共に本願力を喜べることゝて一語々々函蓋相應せるものありき。講話後宗意につきて互に所感を傾けつゝ相携へて、同夜熱田町高倉前說教場伊藤良胤氏方にて亦講話會を開く。從來篤心なる信者多きが上に、青年男女の眞面目に道を求むるもの集り來り、誠に有難き會合なりき。終りて佐久間氏方にて宿泊し、翌日午前は同朋相集まりて團欒共に信仰を語り、談偶々懷舊談に追りて、廿年前の昔を想起し我が恩師加藤法城先生の事に及び荷恩の情感謝措く能はざるものありき。幸に住田師より先生の遺筆略文類悉禿鈔及び二門偈の講義を分與せらるゝを得たり。同夜青木兵二郎氏宅にて叮嚀なる饗應を受け、引き續き

大谷大學圖書館 22466

和順會の講話に臨めり。同會は澤師の創立せらるゝ處にして十年一日の如く繼續せるもの、青木氏開會の趣意を辨じて靈感押えがたく歔欷之を久うし、滿堂感涙に咽ぶ、實に尊かりける事どもなり。二席講話を畢り說者聽者大悲を仰ぎつゝ散會す。夜半亦同胞諸氏の渥き見送りを受け京都行きの汽車に乘る。

## 仙臺

仙臺は從來有緣の地なり。されど三四年來暫く打絕えたりしが、今秋は第二高等學校道交會紀念祭の爲めに赴く事となりぬ。十月十七日夜東京を發し、夢寐の間に白河の關も過ぎ宮城野の曙に目は醒めぬ。時間も早ければ松島に下車し、秋の松島を訪ふ。此地を訪ふ每に入信以前に嘗つて惱みつゝありし遺蹟を思ひ出でゝ感謝の念佛湧き來るものあり、新富山に憩ひ、觀月樓にて朝飯を喫し、瑞巖寺に詣うて、船を艤して塩釜に向ふ。往昔達摩大師此地に來り聖德太子の出世をまちたりといふ傳說など船頭より聞きつゝ、天下山水の美を眺めつゝ、やがて塩釜に着し汽車にて仙臺に入る。

三好愛吉、正木昇之助、杉溪泰山の諸氏を初めとし道交會の人々迎へらる。先づ東三番丁大谷派說敎場に着し、午後同所に講話をなす、當地は眞宗の信徒頗る少しと雖ゝ其聞法の志頗る切なるものありき。ことに青年求道の士熱心に傾聽せり、又最も驚くべきは近鄕の人曹洞宗僧侶にして不思議なる緣により「盡十方の無碍光は無明の闇をてらしつゝ、一念歡喜する人を、必らず滅度に至らしむ」といへる和讃を誦して頓に攝取の光明に接し他力信心に入れるの人遠く來り訪はる。同夜亦講話をなす、翌十九日午前宮城縣師範學校に於て一場の講話をなす、午後五城館に於て正しく道交會紀念會演說をなす、杉溪泰山氏麻生道戒師の演說あり、余は現代青年の信仰問題につきて述ぶる所あり、會後道交會自炊寮に於て三好、正木兩氏を始め寮生諸氏と團欒共に信仰を談り、晩餐の饗應を受け、夜半諸氏に送られて麻生師と同車し仙臺を辭し、翌二十日朝上野に着し直ちに歸舍日曜講話をなす。

## 敎誨師講習會

淺草別院輪番、大草慧實師の計畫により、大谷派本山は各地監獄に派遣しある敎誨師を同別院に招集し講習會を開きたり、是一は時勢の進運に伴ひ、一は敎誨の根底たる信仰を鼓舞するが爲にして殊に小河監獄事務官等の翼賛による著るし、會期は十一月十日より一ヶ月開會式には大草輪番の挨拶荒木敎學部長の開會辭、小山監獄局長の演說、南條文雄師の講話、講習員總代本多澄雲氏の答辭あり、其講師は南條、村上、齋藤、近角、小河、山上、泉二、片山、福來、吉田、乙竹の諸氏にしてなほ講習中東京各監獄、八王子女監、川越懲治場、横濱監獄、東京市養育院、同じく感化部、盲啞學校、精神病院、帝國圖書館等を參觀し各典獄始め多大の同情を以て便宜を與へられたり。開會式には斯波宗敎局長、村上專精氏の演說ありたり、敎誨師諸氏は日を以て夜につぎ非常の精勵にて常に合宿して交情を溫め、茶話會を開きて、實驗を語り、信念の修養、事務の打合せ其效果頗る見るべきものありしといふ。

## 求道會館設立喜捨金受領報告（第廿二回）

一金五圓也　東京　碓井くに殿
一金五圓也　北信　中條青年敎會殿
一金貳圓也　鹿兒島　和才誠司殿
一金壹圓也　北信　丸山音次郎殿
一金壹圓也　北信　北條幸作殿
一金壹百圓也　近角常觀殿
一金五拾圓也　近江　牧田孫右衛門殿
一金壹圓也　越後　渡邊萬吉殿
一金五拾錢也　越後　富永直德殿
一金參圓也　信濃　伊藤傳兵衛殿
一金拾圓也　越後　鷲尾敎導殿
一金五圓也　越後　吉田佛敎會殿
一金五拾錢也　越後　原熊吉殿
一金參圓也　江州　村瀨嘉平殿
一金五圓也　鹿兒島　川口ちよの殿
一金拾圓也　名古屋　青木兵二郎殿
一金壹圓也　福岡　木屋ちゑ子殿
一金貳圓也　福岡　松尾斗平殿
一金壹圓也　福岡　木屋久磨殿
一金壹圓也　肥後　園田政太郎殿

小計　金貳百七圓也

通計金貳千六百五拾四圓參拾八錢也

右御寄附を忝うし難有奉存候

茲に謹みて奉感謝候也

傳道多忙の爲め九十二ヶ月休刊申譯無之、其補として前號紙數倍加候間左樣御思召被下度候也

妙音院了祥師述　講師石川了因師閲

# 妙音院了祥師歎異抄講記

平松理英
大河内理外　同校

改正定價金四圓
郵送料不要着金即時發送

憂に余輩は聊宗學界の爲に資せんと欲し本書の像約出版を企て爾來孜々として原書の校讐に從事せしに忽左の如き諸種の難關に逢著し遂に出版延期と豫約法改正の已むを得ざるに及べり

(一)了祥師の博覽多識なる講述の際引證せらるゝ所の書籍頗多く而て其の書目中帝國圖書館、眞宗大學書庫等にも藏せざる書籍あり而て筆記者は僅に初句と末句とを記して全文を略せるを以て引用の趣旨判然せず讀者をして隔靴搔痒の歎あらしむる事(二)余輩が得る所の筆記は最精確なる者なるに似たれども傳寫の際幾分誤脱の跡なきに非ざる事(三)世人往々了祥師の眞面目を知らず其の機鋒鋭脱無遠慮に古來の學説を論評せらるゝを見て桀狗堯を吠るの痴態を演し師を目するに異解不正義者を以てする者ある事(四)聞記最後の誓願不思議に就て十門分別の中第五門に至りて了祥師易簀せられしを以て功を一簣に欠きたる事等なりとす

若此の儘にして發行せば啻に讀者をして隔靴搔痒の歎あらしむる而已ならず余輩が了祥師を尊重する所以と宗學界に對して盡す所の本旨に戻らんとす、依て余輩は凝議の末左の方法を案出せり

(イ)本書の校閲增補を直接に了祥師の學脈を傳へられたる嗣講石川了因師に乞ふ事(ロ)本書末尾十門分別の第六以下は了祥師の上足たり開華院法住講師(時に周山窺司と稱す)が師の一周忌辰に報恩のため講讀せられし講錄を添ゆる事(ハ)了祥師が歎異抄に大關係ありとして引用せられし親鸞聖人血脈文集を附錄とする事

右に就て余は石川嗣講を訪ひて懇請せしに同師は先師の遺錄が世に公にせらるゝを隨喜せられしも其の校閲增補の容易ならざると同師が目下少しく健康を害せられて日々多くの時間を讀書に費す事を得ざるとに依りて已むを得ず左の如く出版期日を延期したり

(二)本書を上下二卷とし第一卷を九月中旬に、第二卷を十一月末日迄に出版し各豫約者に送本す(ホ)製本は略綴の豫定なりしを總クロース金文字入とす(ヘ)四號活字を五號活字に改め紙數を減じて代價を引下げたり

以上本會及余輩が此の書出版のために種々苦心せるを諒とせられ期日の延引せるを咎めらるゝなくば幸甚也

前記廣告の旨趣を以て校讐に從事したる所石川講師及小納敎用多忙なりしため漸次出版延引せるが近日上卷の校訂粗終了せしを以て更に一回の最終校讀を爲し直に印刷製本に着手致すべく候へは遲くも十一月二十日迄には各豫約者諸君の御手許へ配達可致候

明治四十年十月

發行所　東京府荏原郡品川町北九十五番地
眞宗法話會出版部
電話新橋四五四四番
口座番號七五三六番

出版代表者　平松理英

十一月發行

求道第四卷第六號

本號には特に近角講述「眞宗慶歎」七項を掲載す。頁數並月の二倍以上。

右僅少の殘本有之候御入用の御方は至急御申込願上候　（但し定價一部金貳拾錢）

求道發行所

南條博士解題
親鸞聖人御傳鈔　再版
一部五錢十部以上二割引五十部以上三割引郵税三冊迄二錢
施本用裝釘美

發行所　東京振替貯金口座番號四五四四番　眞宗大學二六八番　無盡燈社

無盡燈

第十二卷
第十一號

要目

隔融辯……小原一朧
▲光德餘香……南條文雄
嗚呼靈河の逆航者……記者
▲續有章無章錄……鳳溪
華嚴經を本位とせる佛敎統一論……玉代勢法雲
▲迷信の樞府を靈化せよ……默翠
奈良朝の古文書に現はれたる淨土敎
史料……山田文昭
▲草のいのち……紫明
梵文妙法蓮華經和譯……南條文雄
▲巢鳴臺晩秋行……肅外
明惠上人の華嚴敎……和田龍造
▲霧の海……紫明
太蘭笠……田仁師

定價一部拾錢半年五拾五錢一ヶ年壹圓

詩集

# 消なば消ぬかに

文學士　三井甲之著

（定價四拾錢郵稅二錢）

目次


●消なは消ぬかに
●氷る冬の夜
●生れしこのかた
●寫眞
●初夏
●友のふみ
●女の衣
●秘めたる心
●新室
●身を地に投ぐれば
●名殘の思
●死
●鬼力
●小さきねたみ
●時はいつ
●驚き
●卯花
●夢
●にくみ難きは
●蟬
●天のめぐみ
●秋草
●寂寥
●その横顏
●かへりみ
●若き農夫
●低き聲
●人の運命
●藻伏束鮒
●鳥小屋
●小さき解脫
●夕立
●旅僧
●地の力


（已上三十五篇）

吾人の詩は意志を出發點とし又歸着點とする强烈にして深刻なる心中の動搖波瀾を情趣に直接にして彈力ある言語により緊密に表現せんとす。空漠なる感情の繪畫的記載と平凡なる眞義の教訓的說明をなさむは吾人の理想にあらず。又冗漫なる技巧を弄して消閑の具たらしめむとするものに非ずして、直に實世間生活上の憂患を解脫するの力たらしめむことを期す。眞面目に人生を味はむとする青年諸君の同情を得むことは著者の至願也。

發行所　東京神田區表神保町　振替口座四一〇五　電話本局一六一八　彩雲閣



近角常觀著（第九版）

## 信仰之餘瀝

定價拾五錢　郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）

## 人生と信仰

定價貳拾錢　郵稅壹錢

近角常觀校訂（再版）

## 冠頭 歎異鈔

一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）但三冊までは郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

近角常觀著（第四版準備中）

## 懺悔錄

定價貳拾錢　郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區春木町二丁目二十一番地　森江分店

賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所


## 規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

| 一部 | 一ヶ月 | 六ヶ月 | 一年 | 郵稅一冊 |
|---|---|---|---|---|
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛」の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし


明治四十年十一月廿七日印刷
明治四十年十二月一日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
東京市神田區神保町

大賣捌所　東京堂

# 前號要目


求道

◎信仰問題の樞軸

感謝

◎天下何の處か感謝なからん◎秋思◎嗚呼島田蓉根翁◎嗚呼陸實居士◎嗚呼綱島梁川君◎義なきを義とす◎嵯峨詣

講話

◎觀佛本願力　近角常觀

告白

◎大悲の善巧終に我を攝取し給ふ　有田廣

◎感恩　後藤龍緣

感話

◎於戲綱島梁川師　塚本大愚

歌俳

◎磯の月草（短歌）　左千夫

◎秋の海（同上）　增田甚

時報

◎暑中傳道日記　旭村生

◎求道學舍紀念日◎若松求道會◎佛教青年聯合會

眞宗慶嘆　近角常觀

序言　眞宗慶嘆

一　如來本願　二　一佛名號

三　招喚勅命　四　父母因緣

五　利他願海　（未完）



求道第四卷第七號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十年十二月一日發行（毎月一回一日發行）